

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

M・O・H Journal

- to communicate and convey the message of Shiga's traditional principles of M・O・H -

42号

2014
Winter

特集: ほほえみで昭和の暮らし

M・O・H通信

42号

特集: ほほえみで昭和の暮らし

2014 Winter



「鼓動」

ある冬の日。電車に乗っていた。陽も暮れて暗がりの中を、唯真っ白な雪が深々(しんしん)と降り積もる。そんな様を窓ごしに、ぼーっと見ていて。なんて気持ちがいい。このシンシンと無音の創り出すリズムが僕の鼓動と重なって共鳴する。魂の深い深い場所で生きている事を感じる。

●奥島圭二 (おくしま けいじ) = ガラス造形作家。1977年滋賀県生まれ。2000年立命館大学産業社会学部卒業。2002年富山ガラス造形研究所造形科修了。現在高島市に工房を構える。全国各地で展覧会開催。米国や韓国でも展覧会に参加。第20回テールウェア大賞審査員賞受賞など複数の公募展にも参加。

「作品作りを通して、生きるという事を真摯に見つめて行きたいと思っています。作品に想いが宿りますように。」

●「夏の終わり」
●僕の抜け殻は蟬の亡骸。
●セミの脱殻は僕の亡き骸。
●何かが終わりをまた何かが始まって行く。僕もいつかそっと脱け殻を飛び出して、そしてまた新しい物語の中へと。



[連絡先]

kj glass art 奥島圭二

TEL: 090-6671-3017

MAIL:

jk094kilncast@yahoo.co.jp



「M・O・H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★ M・O・H通信の役割 ★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M → もったいない

循環

他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O → おかげさま

共生

人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H → ほどほどに

抑制

欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

contents

目次

特集「ほほえみで昭和の暮らし」

M・O・H巻頭言

ほほえみで昭和の暮らし 内藤 正明、肥田 嘉昭(写真) …… 3

M・O・Hな人 彦根市編

河童が結ぶ子どもと地域の絆 川崎 敦子 …… 5

① 寄稿 住みこなす知恵の歴史

昭和の暮らしから学ぶこと 谷 直樹 …… 9

② 寄稿

「田ね庵」ができるまで 押谷 友之 …… 17

③ 寄稿 我が集落の18号台風と思う

「住ム」ハ「澄ム」ナリ 上田 洋平 …… 25

④ M・O・H対談

「もったいない」の事業化で世の中を変える!

熊野 英介 & 森 建司 …… 32

里のお話

冬木立 三山 元暎 …… 41

M・O・H レポート どうすれば水害から身を守れるの?

「流域治水」ってなあに? …… 42

M・O・H レポート 第3回よばれやんせ湖北～生産者消費者交流会～

地産地消してますか? …… 51

M・O・H レポート なでしこ滋賀ネット

『食hana咲かそう!』開催しました …… 53

M・O・H レポート 美の滋賀語り部マイ★スターになろう!

『美の滋賀語り部マイスター』養成講座 …… 55

漫画

山暮らし子育て日記 オノ ミユキ …… 57

心温まる物語

いまごろ何してるのかなあ 今関 信子 …… 59

本の紹介 …… 61

講演日記 …… 62

M・O・Hせんりゅう …… 63

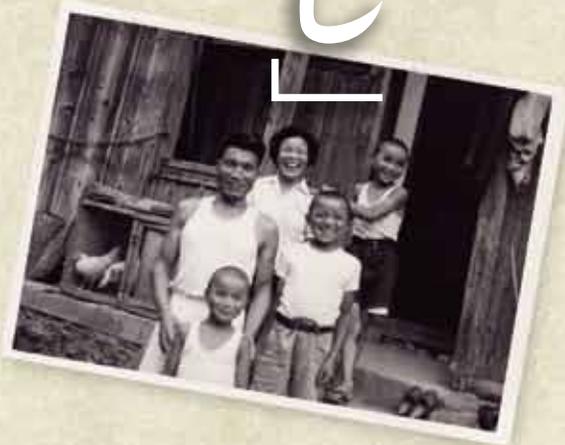
M・O・Hニュース …… 65

通信概要 …… 68

読者の声 …… 69

表紙イラスト 佐々木洋一

●ささきよういち=1940年生まれ。高校在学中より長浜市周辺の風景を数多く描く。長浜市展特選13回。長浜市展委員、同無鑑査。県展特選4回受賞。平成5年5月画文集「わたしの長浜」を発刊。長浜アーティストクラブ会員。



「ほほえみで 昭和の暮らし」



昭和35-36年の余呉町
北国脇往還伊部宿本陣の当主
肥田嘉昭氏は大学卒業後すぐに
丹生小学校小原分校に赴任。
高時川源流地域、まだランプ生
活のなか冬には子ども達と寄宿
生活を共にし写された写真です。

このところ昭和への関心が高まっています。それは、昭和世代が歳を取って、過ぎし昔を懐しんのであるのは確かでしょう。しかしそれ以上に、近年の経済至上的な社会がもたらした「資源や環境、さらに経済や社会」などあらゆる面に対する危機意識が、懐旧を越えた昭和への関心を引き起こしていると思われまます。

本誌M・O・日の目指す、もったいない社会」というのが、昭和のどのあたりに近いだろう、というのはいさしば議論になるところです。ちなみに、温暖化防止の京都会議のころ、研究者間で、石油消費半減を目標にすれば、昭和40年初頭がそうだったろうなどと議論し合ったことがあります。

エネルギーや資源の消費といったモノ

の面からの評価ではなく、「三丁目の夕日」の人気に見られるように、心の面での昭和への関心がより高いように思われます。いま一番求められている、人と人の絆、人と自然のふれあい」といったことが豊かにありました。まさに「懐かしき未来」として、今後の社会像を中高年者には馴染みの姿として示してくれまます。もちろん貧しくて不便だったのは言うまでもないとしても、それらは経験して分っていることです。新たな工夫によってうまく対処できるのではないのでしょうか。そうすれば、昭和は「ココロ豊かで、もったいない」を実現した社会のモデルになれると思います。皆さんはどうお考えでしょうか？

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

センター長

内藤 正明



「感謝です。ほんと〜に」と笑顔の川崎氏

河童が結ぶ 子どもと地域の絆

川崎 敦子

NPO芹川 子育て支援部門 代表

彦根に昔から伝わる妖怪を集めた、楽しい『彦根妖怪図鑑』が2013年春に出版されました。その元になったのは、彦根市から民間委託を受けて学童保育を行っているNPOが夏休みの子どもたちのために企画したカリキュラム。河童と子育てと地域の関係とは？ 妖怪たちに込められた思いの背景を探りました。

ていしんしゃ

■ひこね街の駅「逡信舎」（彦根市）

■2013年9月27日



みんなでつくった彦根妖怪図鑑

自分の町を好きになる そのための妖怪

「子どもたちの土台になるものを育てるには、まず自分が生まれ育った町を好きになったり自分の町に誇りをもつことから始めないといけない。そのために何ができるだろうと考えていたら、それが河童だったんです。」

福々しい笑顔を河童の話で一層輝かせた川崎敦子さんは、彦根市の金城・城西・平田・佐和山学区で放課後児童クラブ、いわゆる学童保育を運営している「NPO 〇芹川 子育て支援部門」の代表だ。学童保育と地域づくりと妖怪…いったいどういつ関係があるのだろうか？

川崎さんは子どもたちが自分の町を好きになるために、地域に気おけない友だちがいる、地域の人をよく知っている、地域の話をよく知っているという3つの柱をあげる。ところが、地元・彦根の伝承を探したものの、出てくるのは侍の話ばかり。庶民の昔話はまったく残っていない。そんな時に北風寫真館の杉原正樹さんから妖怪の話を知って「これや！」

とひらめいた。昔話がないなら妖怪の話でもいいではないか。

「もともと子どもたちによく昔話の、語り、をやっていました。絵を見せなくて語ることで、子どもたちの頭の中で物語が動くんですよ。妖怪を通して、想像遊び、は、地域を好きになるための手法にぴったりだと思いました」

調べてみると白山神社の天狗や萱原の二丈坊、江國寺の大入道…次々に妖怪の話が出てくる。芹川の妖怪を探していた時には「私が子ども頃は芹川に河童がいました」と証言してくれるおばあさんまで現れた。

「私自身、昔話に出てくる妖怪が大好きなんです！ 庶民の歴史を、お話、として口頭で伝えてきた口承文学は、庶民が幸せになる智慧を先祖から受けとる唯一の方法だと思えます。例えば二丈坊は夕方になると出てくる妖怪。子どもたちに『夜に山へ行ったら危ない』というよりは『二丈坊が出てくるぞー！』といった方が強烈なイメージになる。自分たちの身を守るために、昔からこういふ妖怪が使われてきたんじゃないでしょうか」

夏休みの妖怪探し

5年前、聖泉大学の心理学の先生3人にカリキュラムの組み方を教えてもらい、学童保育の子どもたちが地域の中で妖怪を探するという夏休みの取り組みがスタートした。

金城・平田小学校エリアの子どもは芹川の河童、城西小学校エリアは白山神社の天狗、佐和山小学校エリアは江國寺の大入道と、それぞれに身近な地域に伝わる妖怪がターゲットだ。

「最初の日は、河童ならキュウリが落ちてるのかな(笑)。『××を落として困っている。〇〇へ届けてくれ』と妖怪から手紙が届いて子どもたちは大騒ぎ」

妖怪からの手紙を手に、子どもたちは地域へ出ていって課題を果たすことになる。事前に地域の人に協力を頼んでいるが、子どもたちが散策の途中で偶然出会ったお年寄りに「この辺りに河童いませんでしたか？」と話しかけることも。おじいさんやおばあさんも妖怪の話だと「二〇二〇」しながら「そういえば、あの辺にいたかも」と自然に答えてくれるという。



① いろんなことに挑戦したい川崎さん ② 窓には一反もめんが ③ 古くは電話交換所として使われていた通信社 ④ 地域のみなさんと楽しい行事がいっぱい ⑤ 有名人も訪れた

こうして地域の人たちとも顔見知りになり、お互いに話ができる関係が形作られていく。子どもたちは次々に起こる思いがけない出来事にドキドキワクワクの連続。最後は「来年の夏、また来ます」と手紙が届けられ、妖怪たちは自然の中へ帰っていく。妖怪からの最後のプレゼントとして手渡されるお守りは、「新学期がんばりや」「一生はついていけへんけど、ずっと応援してるよ」という思いを込めて指導員が手作りしたものだ。

子どもたちの妖怪探しは、大人にとっても楽しい夏休みになるというおまけまで付いてきた。学童に子どもを預けている親にとって、夏休みは毎日のお弁当づくりや送り迎えをしなくてはいけないためにいつも以上に負担が大きい。食卓でイライラして「早く食べなさい!」と叱っていたのが、「今日は何をしたの?」と毎日子どもから妖怪の話を聞くようになったという親も多いという。

「保護者も職員も準備などいろいろたいへんなんですけど、『ああ、楽しかった。夏休み早く終わったね』というんです。妖怪のおかげでみんなが楽しかったといえる

のがいですよね」

そう話している川崎さんも笑顔で、本
当に楽しんでいた。

見えないものに 思いを巡らす想像力を

現代の子どもたちは生まれたときから
バーチャルな世界に囲まれて育ってきて
いる。そのため、想像力が極端に衰えて
いるという。子ども同士で遊んでいても、
「それ貸して」「仲間に入れて」と自分か
らいわないと相手に伝わらないというこ
とすら知らない。川崎さんは指摘する。
子どもはいつも大人の手を借りて遊んで
いて、学童保育でも指導員が一生懸命遊
ばせる。そうした結果、自分たちでは遊
べない子どもを作ってしまったこと
に気づいた。

「バーチャルな世の中で、妖怪は子ども
たちが想像できる唯一のものだと思いま
す。妖怪を語ることで、ああだろっかこ
うだろっかと子どもたちが思いを巡らせ
て想像する力を養ってくれるのではない
かと考えています」

妖怪という体験をすることでこれまで
欠けていた想像力を小学校低学年・中学
年の間に少しでも養えば、成長した時
に見えないもの、こ思いをはせること、
ひいては相手を思いやる気持ちでもできる
のではないかと期待している。

子どもを教育することに留まらず、学
童保育を地域づくり・町づくりにつなげ
ていく、それが川崎さんの大きな目標だ。
大人にも彦根のすばらしさを知って欲し
い、彦根の町を楽しんで欲しいという思
いから「彦根を映画で盛り上げる会」事
務局の仕事も引き受け、教育とは違った
アプローチで町づくりに関わっている。

理想の学童保育をしたいと思いつなが
らもどうすればいいのかわからなかった時、
畑違いにも関わらず手をさしのべてくれ
た環境保護活動の「NPO芹川」。そし
て、自然に集まってきてくれた優秀なス
タッフ。たくさんの不思議な巡り合わせ
のおかげで今日がある。「だから、これ
からも流れに身を任せていきたい」と話
す川崎さんの周りで、次はどんな楽しい
ことが始まるのだろうか？



彦根妖怪図鑑

- 執筆・編集／NPO法人
芹川 子育て支援部門
- 絵／連藤 久見子
- 発行／NPO法人芹川
- 配布価格／1050円＋税
- 内容／「芹川の河童」や
「江國寺の大入道」など
彦根・甲良・多賀に伝わ
る妖怪を絵と解説を入
れて紹介。子供たちが想
像して描いた河童のイ
ラストも愛嬌たっぷり。
NPO芹川の活動報告も。

感謝 川崎敦子

●かわさきあつこ1965年生まれ。
保育士、障害者施設指導員を経て、放課後
児童クラブの指導員になる。平成21年より
NPO法人芹川子育て支援部門代表として、
民間の放課後児童クラブの運営に携わる。

●通信舎連絡先
ひこね街の駅通信舎内

NPO法人芹川子育て支援部門

〒522-0003 滋賀県彦根市河原2丁

目3-4

TEL: 0749920093666

昭和の暮らしから学ぶこと — 住みこなす知恵の歴史

谷 直樹

大阪くらしの今昔館 館長

懐かしい未来って、なに？

“懐かしい未来”、最近よく聞かれる言葉です。「昔は…」
「バブルの頃は…」という例え話もよく耳にします。「あの頃は…」と言われる、あの頃はどんな暮らし向きだったのでしょうか？ 懐かしいころの時代はどんな時代だったのでしょうか？ 現在をアニメや映画に例えて、“トトロとアトム（鉄腕アトム）と三丁目の夕日”が混在する、と比喻しますが、果たして何を必要としているのでしょうか。利便性を重視するあまり、私たちは何を置いてけぼりにしたのでしょうか？ そんな疑問を解くヒントを、大阪くらしの今昔館で見つけました。館長の谷直樹さんのやんわり目線で教えていただきましょう。お後がよろしいようで…。

1. 路地と長屋の町

今年、生誕1000年を迎えたオダサクこと織田作之助（1913～1947）の代表作に『わが町』（昭和18年）がある。物語は大阪の「河童路地」が舞台である。「路地は情けないぐらい多く、その町にざっと七、八十もあるうか。いったい貧乏人の町である。路地裏に住む家族の方が、表通りに住む家族より多いのだ。」と書かれている。路地の住人は、主人公である人力車夫「ベンケットの他やん」、「傘の修繕屋、羅宇しかへ屋、落語家、弁士、相場師、一銭天婦羅屋」といった人びとである。「貧乏人の町」といわれるが、祭りともなれば子どもに揃いの浴衣を着せる程度の余裕はある。隣の家の様子は筒抜けで、「他やん」が娘をきびしく叱つていると、それを聞きつけた隣の落語家「メ団治」がとんで来てなだめにはいる。

オダサクが描いた大阪の町と人は、路地と長屋が舞台である。昭和戦前の長屋ぐらしはいたっておおらかであった。当時の大阪は「大（だ）大（おほ）大（おほ）大（おほ）」といわれ、御堂

筋の近代的な町並みや道頓堀の繁華街などが代表とされるが、もう一つの顔として路地と長屋の庶民の町があった。

2. 商店街・路地・長屋の町

私が館長をつとめる「大阪ぐらしの今昔館」には、「商店街・路地・長屋」とサブタイトルをつけた「空堀通」の精巧な模型がある。空堀は大坂三郷の周縁部にあって、もともとは徳川幕府の御用瓦師の土取り場から出発した。江戸時代の中頃から長屋が建てられ、明治時代には空堀商店街が発展した。この地域は路地と長屋の町としても知られ、上方落語の「駱駝」にも登場する。この模型の時代は、昭和13年（1938）8月24日に設定されている。一見、江戸時代以来の町並みのようであるが、よく見ると、表通りには「すずらん灯」と呼ばれた、しゃれた街灯があり、町家も軒蛇腹のついた本二階建てが普及している。まぎれもなく昭和戦前の大阪の町並みである。表長屋の脇から路地が延び、奥には裏長屋がぎっしりと並んでいる。路地には共

同水道、共同便所、地藏堂などがある。

模型の設計は、増井正哉氏（現・奈良女子大学教授）が担当し、徹底的な調査が行われた。まず、地籍図から宅地の形状を把握し、現地で地形の高低差を計測し、何軒かの住宅の実測調査を行った。ふつうの模型ならここまでであるが、増井氏は、模型の制作範囲に昭和の初期から現在まで住み続けている人をすべてリストアップし、また転居した人は現住所を訪ねて関係資料の調査と聞き取りを行った。その結果、居住者や世帯構成がおおむね明らかになり、建物についても当時の住宅の間取りや外観だけでなく、隣近所の建物や町の景観の情報も収集した。例えば古写真は確認作業を行って場所を特定し、裏長屋の格子の種類は近隣の複数のデザイン例からお年寄りに選んでもらい、共同水道の周りは石鹸の置き場まで聞き取りを行った。

馬方にむち打たれ、善安筋の石畳の坂をあえぎながら登る馬力（馬車）を、いつも2階の窓からながめていた少女、路地の入口で駄菓子売っていったお婆さん、



1



2



- ① 空堀商店街の表通り
- ② 路地裏の地藏盆
- ③ 空堀商店街の表長屋と裏長屋
- ④ 2階から馬力をみる少女



4



歯医者の前で駄々をこねる子ども

歯医者の前で駄々をこねる子ども、便所の汲み取りのおじさん、おかみさんの井戸端会議など、聞き取り調査による地元の人々の思い出話が、この模型の中に再現されている。そして8月24日は地藏盆の日である。路地の奥にあるお地藏さんの前では、路地の上に仮設の屋根を設け、お坊さんの横で浴衣を着た子供たちが丸い輪を作って数珠くりをしている。長屋の軒先の提灯は、住人である扇子職人のおじさんが作ってくれた。盛んであった昭和戦前の地藏盆の風景が、みごとに再現されているのである。

現在の空堀は、震災をまぬかれ、伝統的な居住空間が残されている大阪でも

数少ない地域である。近年は、長屋の町並みを活用した取り組みが活発に行われている。昭和の60年間におよび暮らしの知恵をこの模型に問いかけることで、現代のまちづくりに対する様々な示唆を得ることができるとは思えないだろうか。

3. 豊崎長屋の暮らしと文化

ここで、最近、長屋の再生プロジェクトとして注目されている豊崎長屋での暮らしと文化を紹介したい。豊崎長屋は、大正10年（1921）から同15年にかけて開発された住宅地で、大阪駅から徒歩20分ほどのところにある。300坪ほどの敷地の中央を土のままの路地が通り、家主が住む主屋と5棟1軒の長屋建ての貸家（借家）が配置されている。豊崎長屋は大正末年に誕生したが、そこには昭和の戦前から戦後を通して、家主と借家人が育んできた暮らしの文化が残っている。

私をはじめ豊崎長屋の家主さんを訪れた時、木造の主屋を丁寧に住みこなししておられた。室内は台所の土間を

床土化するなど部分的にリフォームを行い、トイレや風呂の更新はあるが、障子・襖・床の間など和室中心の住まいが引き継がれている。伝統を意識した床の間の飾り付け、季節を感じさせるスダレや風鈴、台所に貼られた火の用心の御札、水や榊が供えられた神棚や仏壇など、豊かな住文化が息づいていた。

借家人である長屋の住人にも、戦前から住み続けてきた人たちが多く、家主さんと同じように和室中心の住まい方や、路地の掃除や水まき、盆栽の手入れなど、共用空間の維持管理もしっかり行われている。住人たちは、昭和30年代・40年代の同じ時期に子育てをし、お互い子どもたちの面倒も見合ってきた。今では高齢者だけの世帯になったが、気心の知れた人間関係の中で安心して暮らしている。路地を介した長屋建てという空間の形と、長年住み続けるなかで培われた人の繋がりを両輪とした伝統的な居住システムがそれを可能にしているのである。

さらに、高層ビルが建ち並ぶ都心にあるながら、今なお歩いて暮らせる生活圏

が維持されていることも豊崎長屋の魅力である。高齢者の徒歩圏とされる500m圏内に、多くの生活利便施設が立地している。安くて、店の人の顔が見える商店街、高齢者には欠かせない病院、地下鉄の駅、郵便局、図書館などの公共・公益施設もこの圏内にある。そのため、車を所有している住人はなく、車を持たなくても生活できる条件が整っている。

再生プロジェクトを開始するまでの豊崎長屋は、築後80年以上を経過して建物の老朽化が進み、空き家も増えていた。そこで、大阪市立大学生生活科学研究科の教員や学生が、家主さんや住人の方の理解と協力を得て、7年間にわたって長屋住まいの調査を行い、実際の再生工事、つまり設計と施工を行ってきた。その中で、高齢者には、コンクリートではなく生活になじんだ木造の生活空間がより適しているという確信を得た。そこで、よくある商業的活用の町家再生ではなく、住宅としての長屋再生を目指すことにした。ここにこのプロジェクトの特徴がある。木造を大事にするため、外観はできるだけ伝統的な様式

に戻した。一方で、木造住宅の耐震改修や内部の改装などは最新の技術と材料を使い、住宅デザインの研究室の教員と学生の設計で、現代の生活空間としても魅力のある長屋に仕上げていった。

再生長屋が完成すると、工事に参加した学生が長屋の住人として住み始めた。高齢者だけでなく、若者たちも長屋ぐらしに新しい生活像を見出したのである。それまでワンルームマンションに住んでいた時は、毎日夜遅く帰って、住まいは寝るだけの場所であった。長屋ぐらしを始めてからは、夕方に家に帰り、室内に風を通したり、趣味の人形を飾ったり、本を読んだり、住みごたえを感じている。毎週水曜日には、同じ長屋の若者が集まって食事会をするが、近所迷惑にならないように夜10時には切り上げる。路地の掃除や維持管理にも気がつくようになった。若者たちの間でコミュニティのルールが生まれたのである。近代社会が切り捨てて行った日本型の長屋コミュニティが、自発的に育まれていったのは驚くべきことである。こうした経緯をまとめて、今春、『いきている

長屋―大阪市大モデルの構築』（谷直樹・竹原義二編著・大阪公立大学共同出版会刊）という本を出版した。本のタイトルのように、豊崎長屋は「生きている長屋」として現代によみがえったのである。

4. 昭和の暮らしから学ぶこと ―住みこなす知恵の歴史

いま日本の町や住まいは、歴史を活かした再生が求められている。歴史とは過ぎ去ってしまうものではなく、現在を生み出し、その存在の根拠となるものである。日本では、これまであまりにも多くの歴史の蓄積を、惜しげもなく捨て去ってきた。それが近代化の特質である。とさえ思いこんでいた。個人的な文化は歴史によってつくられるという事実が気づくことができなかつたのである。

地続きの国境をもつ国では、歴史の蓄積が隣国との違いを際立たせるものと考えられている。とりわけ歴史的な建造物や町並みは、国や都市のシンボルとして大事にされてきた。歴史はアイデンティティ＝帰属意識を醸成する装置



豊崎長屋と路地

といえるかもしれない。しかし、周りを海で囲まれた日本では、こういった考えが希薄であった。

私の職場がある大阪は、先端都市を追い求めるあまり、歴史都市としての自己評価を疎かにしてきた。ここで発想を変えて、昭和の60年間に市民が蓄積してきた生活文化に注目すべきであろう。「大阪くらしの今昔館」に展示されている、昭和初期の空堀通の模型に再現された生活文化は、都市再開発の波に洗われながらも現代の空堀界隈に引き継がれている。そして地元の人たちは、地域の歴史や文化を大切にしまちづくりを行っている。一方、豊崎長屋でも路地を介した長屋のコミュニティが健在で、長屋内部のリニューアルもあって、若者が住み始めている。

空堀も豊崎も、町の魅力を一言で表すと、他の地域ではほとんど失われてしまった庶民の生活文化が残されていることである。それは、昭和の60年間に蓄積された、住みこなす知恵である。ここは、昔の大阪を知る高齢者にとっては懐かしい記憶の場であり、若者や芸術家、



① 豊崎長屋と主屋 ② 豊崎 主屋の座敷から仏間を見る ③ 豊崎 主屋の座敷 ④ 豊崎 長屋遠景

外国人にとっては、未知の文化を体験する場になる。昭和の生活文化という歴史資産に光を当て、その創造的な活用を図ることが、現代社会から要請されているのではないだろうか。
 (豊崎長屋は居住地なので一般公開はしていない。)

温故知新 谷直樹

●たになおき 1948年兵庫県生まれ。京都市工学部建築学科卒業。同大学院修了。工学博士。居住文化史、博物館学専攻。堺市博物館主任研究員、大阪市立大学講師、助教授、教授を経て、大阪市立大学名誉教授。大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)館長。主な著書『まち祇園祭すまじ』『町に住まう知恵』『住まいのかたち暮らしのならい』『いきでいる長屋』『中井家大工支配の研究』『大工頭中井家建築指図集』など。

●大阪くらしの今昔館
 〒530-0041 大阪市北区天神橋6丁目4-20 住まい情報センタービル8階
 大阪市立住まいのミュージアム
 TEL: 06-6242-1170
<http://onlyyakukan.com>

「田ね庵」ができるまで

押谷 友之

田ね庵主人

生まれたころからここにいた

自分の生まれた場所が変わらずあり、住み続けられることは幸せなことです。えっ?!首をかしげる方もいる?そうですねえ、新しいことや見たことのないものに価値を見出そうとしている人からすると、疑問でしょうねえ。人生山あり谷あり、人それぞれですが、どうしても気になって仕方がない、という人がおります。押谷友之氏、自宅の近くの空き家を改装してカフェに仕立てました。いずれの土地にも歴史は残っています。ひも解いてみると、思わぬ発見が…。ちよつとのぞいてみましょうか?



田ね庵
cafe





改修前の山田邸。母屋と蔵の間の物置がCAFEに

◆よその家を勝手に心配

私の故郷、上草野の谷筋は耕地が狭く、多くの人々は農地を求めて近郷近在で「出作り」をしていました。私の家の田圃は「たんのしょ」というところにあります。「たんのしょ」とは田根の荘が訛ったもので、現在の田根地区（田根小学区）にあたります。田圃へは郷野から谷坂トンネルを抜けて大八車を曳きながら七曲りの道を通いました。田植えや稲刈りといった農繁期には田圃の一角に建てた田小屋で寝泊まりしながら、日が落ちてでもなお、手元が見えなくなるまで泥にまみれ、地に這いつくばるようにして過酷な田圃づくり

に汗を流していた父母の姿が蘇ります。齢を重ねてからもこの道を通るたびにその頃のことを思い出されます。長浜から、上草野へ墓参りに行くときなど、草野川沿いにいい道があるのですが、様々な想い出につながる谷坂の道をあえて選ぶのが度々でした。

想い出とは別に、数年前からこの道筋で気になっていたことがありました。

それは、小室こむろの集落の中ほどの大きな家に人の気配がなく、空き家になっていたことです。妻入りの大きな家でした。「家は閉め切ったままでは傷むし、シロアリの餌食になってしまおう」と、縁も所縁もない人様の家のことを勝手に心配していました。

以前、長浜市鍛冶屋町の古民家を仲間とお借りして再生し、フリースペースとして様々なイベントに活用してきました。長屋門のある立派な家で、大正時代にこの地を訪れた井上円了（東洋大学の創設者）が、草野谷の風景を漢詩に詠い、その詩の一節「坐して外を見れば雲また残昇す」から『坐外堂』と名付けました。コンサート、落語会、各種展示会など多彩な催しに利用していたでいています。ただ、しっかりと収益事業ができず、できなければ維持費が捻出できません。谷筋の狭隘な集落ですからイベントごとに駐車場の確保に奔走しなければならず、駐車場の確保は集客に影響します。その苦労はなお

続いています。私が惚れ込んだ小室の家は、横浜市

在住の山田さんという方の持家で、小室の友人のついで、家主さんに連絡を取ってもらったところ、「地域のために役立っていただけなら、お貸ししてもいい」ということでした。お借りすることになったのですが、その活用となると漠然としたイメージしかなく、ないままに「なんとかなるさ」と、改修にあたっての細かな取り決めを契約書にし、いわば勢いでお借りすることになりました。

それが12年の10月でした。実はその時は、全く手元不如意で借りた空き家の改修費用の捻出などとても不可能でした。友人から利益は還元するからと投資してもらい、外壁から改修に入りました。

◆資金なく自ら大工となつた

その後政府系の金融機関の融資を受けることができました。融資にあたっては資金計画も経営計画もちゃんと整えなければならず、民宿とカフェそして木工工房を収入源とするプランを立て、融資の決定となりました。融資が決ま

れば本格的な改修工事に着手ということころなんです。融資も力量に合わせて低めの額に圧縮しましたので贅沢もできず、知人の大工さん呼び、技術指導をしていただきながら、自ら少しずつ工事を進めました。技術的に難しいところは大工さんをお願いしましたが概ね全体の70パーセントほどは手作りということになりました。傷んだ壁は自ら土をこね左官屋さんに。坪庭は、屋敷のあちこちに転がっていた石や石臼を集め庭師になって創りました。さすがに電気と水回り工事だけは業者さんにお願いましたが、大きな難問にぶつかってしまいました。

民宿をするということで融資を得たのですが、民家を民宿するには、建物の用途変更の確認申請が必要だったのです。これがなかなかクリアできず、3か月かかって漸く確認がおりましたが様々な条件が付けられました。非常灯、誘導灯の設置。防火壁の整備。これには本当に苦労しました。14・5ミリの石膏ボードを二枚重ねし、部屋ごとに天井裏を区画するのですから素人には簡単



断熱材を入れ14.5ミリの石膏ボード2枚重ねて区画



二階の大きな空間は防災のため細かく仕切るはめに



①



3



2

- ① 座敷上段の間を望む。8畳大の部屋が6部屋ある
- ② 母屋と醸造蔵をつないでいた物置。天井を落とすし梁を見せた
- ③ 物置にカウンターを造作。カウンターのヒノキは地元産
- ④ 上段の座敷から庭を望む。庭はジャングルだった
- ⑤ 玄関から座敷を望む。下段の間は板張にして、ホールに



5



4

ではありませんでした。最後は、各部屋の排煙口です。部屋の面積の50分の1にあたる広さの開口を天井から80センチ以内に施工せよというのです。実は構造的に無理で、どうにもこうにもなりません。どうしていいのかわからず、暗礁に乗り上げましたが、とにかく排煙口は無理やり造り上げました。この稿を出稿する頃には出来上がると思います。

9か月を経て、民宿部分を残し、とりあえず完成。13席ほどの小さなカフェからオープンしました。地味に、まさしくサイレントオープンでした。というのも、もし開店を知って友人知人親戚までおいでいただいても、たった一人での営業ですからとても対応しきれません。お客様に不快感を与えてしまうと心配し、静かなオープンとしたのですが、翌日の地元新聞に掲載されましたので、たくさんの方々においでいただけるようになりました。そして、お客さんたちは、カフェに入るなり申し合わせたように「懐かしい」「癒される」「落ち着く」などと感想を述べていただくのですが、一体それは何故か、どういう感覚なのか、

どうしてそう思うのか…と、考え込んでしまいました。現実にもまた「懐かしさ」を感じているのですが、こんな大きな家に住んだことも無いのに、そう思ってしまう源泉には何があるのかと。

◆木に宿る生命感

民家は歴史の中で名もなき庶民によって創り伝えられてきた住まいの様式ですが、時代や地域特性によってさまざまに「型」に進化してきました。しかし、大量生産・多量消費・大量廃棄を背景とする社会・経済情勢の変化が、生活様式を変貌させ、「暗い・寒い・不便」であることを理由に多くの民家が壊され遺棄されてゆき、それはなおつづいています。それなのに今更、「古民家は文化」と声高に叫んでみてもその間に消えていった夥しい古民家の数を思うと胸が痛みます。

古民家の伝統的木造建築の素晴らしさには、木造軸組架構の美があります。また、使われている自然素材には時間が経つことよって醸し出される古色の

美があります。古びて表面が腐敗しているかのような木でもカンナにかけると、伐採したばかりと見まちがうほど新しく美しい木肌が現れます。木の命を感じる瞬間です。

その生命感というか、付き合うほどに変化し、生きていような素材としての木が醸し出す波長のようなものが、人の脈動と同期し、「懐かしさ」「安堵感」「癒し」へと昇華していくのかも知れません。

◆「作品」「商品」「物件」そして「家」

建築家はそれを「作品」といい、ハウスメーカーは「商品」という。大工さんはそれを「家」といい、不動産業者にいたってはそれを「物件」という。と、どなただったか建築の専門家から伺いました。なるほど、と納得し、このごろ『家』と呼べるものが減ってきていると感じています。私の住まいの近くの田圃が住宅地に造成され、瞬く間に家が建ち並びました。

以前はよく耳にしたトントントントンという金槌の軽快な音は全く聞こえず、プシュップシュッとという圧搾空気のかき打ち機の音やウーンッウーンッというドライバーの音ばかりで、これは道具の進化ではなく、工法の違いであり、家でなく商品だからではないのかと思ってしまうのです。とてもこの商品が時間の経過とともに、歴史を彩り、古色を帯びて潤いのある空間を創出し、景観を形成してくれるとは思えないのです。

◆「世界遺産」から「集落遺産」へ

生まれ故郷に帰りますと、子供のころから見慣れたあの家があるべき景観の中にあると「あゝ故郷だなあ」と想い安堵感があるのです。そうした家は、正に集落のランドマークであり「集落遺産」です。集落遺産は集落の景観形成に重要な役割を果たしてくれています。世界遺産があるなら集落遺産があつてしかるべきでしょう。ちょっと視線を変えてみてほしいのです。

家は言うまでもなく人工物です。なのにどうして田舎の風景の中で、あたかも自然のような振る舞いをするのかといえますと、自然と同化あるいは調和しているからなのです。四季折々の気候の変化を感じながら暮す日本人の精神風土。それが生み出した民家が古民家と呼ばれるようになってしまいました。カフエ『田ね庵』にご来店いただく人々が、申し合わせたように「懐かしい」「癒される」「落ち着く」などと感想を述べられることの源泉は、この調和の中にあるのかも知れません。だからこそ「集落遺産」として残してゆきたいのです。

小室山田邸を魯山人の星ヶ岡茶寮から拝借し小室茶寮と名付け、カフエを田根の人を意味する an を付けて「田ね庵」としました。もうひとつ「庵」は、衣の裾に取りついて泣く4つになったわが子を縁から蹴落として家を捨て、心のおもむくまま各地に草庵をいとなみ、諸国を巡る漂泊の旅の人生を送った西行への憧れからです。この茶寮とカフエは「家」を残すための維持費を捻出するための苦肉の策として営むものです。



屋敷内に転がっていた切石や瓦、石臼を集め組み上げた庭

なにとぞ「集落遺産」を守るためお力添えを賜りたく思います。

◆むすびに

とまあ、あんなこんな紆余曲折を経て「集落遺産」を残していこうとしているのです。集落のランドマークともいえるような古い家は、地域の名望家として、道やトンネルや橋や用水などの整備に尽力されてきています。それぞれの集落には必ずそういった家があつたはず。名もなき庶民の家は、名望家の家と比べれば造りからして粗悪で、朽ちるのも



小室茶寮の玄関。木製看板も手づくり

早く、なかなか残りません。集落の名望家の事績とともに残っている家は「遺産」として残していくことが生きた歴史を体現することにもなるでしょう。
嘉永二年に建てられた母屋に寄り添っているカフェ『田ね庵』は、早朝七時から

営業しています。珈琲はエチオピア産モカ豆を自家ミルし使用。モーニングサービスは午前11時まで。軽食は、カレー2種、パスタ3種。裏メニューざるそば、カレーうどん、てんぷらうどんも。水曜日はチーズケーキデイ、金曜日はフライ

『小室茶寮』『café田ね庵』へは、旧長浜からは馬車道加納東交差点を北へ道なりに進み、市役所浅井支所あねがわ温泉を右に見ながら国道365号線を横切り、北進。高畑町の浅井北郵便局前交差点を右折(東進)し、およそ600m道路の右(南)側です。駐車場は、小室茶寮東に第二駐車場があります。



デイ(魚・海老などのフライセットランチ)。結びですがおむすびはございませんのであしからず。

温故創新
田ね庵

●おしたにともゆき1949年生まれ。中京大学文学部。滋賀大学大学院修士課程卒。商社勤務を経てマスコミ界へ。サンケイ新聞年間局、西宮新聞に勤務の後、親族の経営する滋賀夕刊新聞社に入社。退社後、編集工房風媒社を設立。その後、地方議会議員に転身。長浜市議3期12年を務め引退。現職中から始めた古民家再生に取り組み、2013年7月小室茶寮・カフェ「田ね庵」を開業、今日に至る。論文「容器包装リサイクル法と中小企業の経営―負担増かビジネスチャンスか―(森島寿京大大学院准教授と共同執筆「商工業研究」2002年10月号)所収」。

●小室茶寮café「田ね庵」

〒526-10263 滋賀県長浜市小室町315

お問い合わせ・ご予約は

TEL: 080-5057-4604

mail: komurosarayo-tanean@ezweb.ne.jp



彦根から移築した富江家。昭和の農村をそのまま再現。(写真提供:滋賀県立琵琶湖博物館)

「住ム」ハ「澄ム」ナリ ～過去(思い出)を育てて未来を創る～

上田 洋平

滋賀県立大学 地域共生センター 助教

災害がもたらした益と害

豪雨、台風、暴風雨、地震……。日本列島は自然の脅威にさらされています。あたふたするのは私たち人間です。現代の私たちは自然に学んでいるのでしょうか？ 少し前の先輩たちはどのように凌いでいたのでしょうか？ 日本列島に遺された爪痕には示唆があるはず。それをくみ取れる五感を研ぎ澄ましましょう。そこで、上田洋平氏の出番です。年長者の記憶をたぐりよせ、私たちに聞かせてくれます。さあ、始まりはじまり。

今年の9月に滋賀県は大きな自然災害に見舞われた。いのちをとられるほどの酷い被害に遭われた地域がある中、私の住む集落にも被害はあったもの、お陰様で甚大な被害からは免れた。そんなわが集落での台風一過の一コマとその感慨を「フェイスブック」に投稿したら本誌編集者から「投稿せよ」とのお達しだった。そこでまず当の投稿を転載の上、蛇足と思うが解説を加えたい。文体がやや軟派なのは、投稿媒体の性質を鑑みてご寛恕頂きたい。

今朝は集落総出で浜の片づけ第一弾。まずは湖岸の公園に散乱した木端をかき集める。今日は小手調べ。折角の浜も無残にえぐれている。さすが桜の木の植わっているところは根が土をつかんでいてくれた。浜そのものに打ち寄せた丸太や木片、ヨシ等の本格的な片づけは琵琶湖の水が引いてから。その量の多さにゾッとする。

が、一緒に作業したおばあちゃんたち曰く「台風の後は浜に走って競争で木の枝やらかき集めたんや」「そうそう、焚

きもん拾いな」「うちらは山がないさかい、ありがたい、貴重な燃料やったんや」…。この類の話はあちこちの浜辺の集落で聞く。台風は惨禍をもたらす一方「めぐみ」ももたらした。

ジェーン台風だったか、伊勢湾台風だったかの後に、乳母車に一杯の「焚きもん（安曇川の船木あたりでは「木流れ」といったらしい）」を積んでニコニコしているおばあさんの写真がある。子供も出てきて家族で拾っている写真もある。琵琶湖博物館にある「大橋宇三郎コレクシヨン」の中だったと思う（27ページ写真参照）。

自然の惨禍の中からも「めぐみ」をつかみとろうとする、そして現にそれをつかみとるたくましさや人と地域にはある。まだどこも悲惨な状況だけど、現に、もうみんな助け合っている。

いま、かつては「めぐみ」だった漂着物は私たち現代人には単に「ゴミ」「がれき」としか見えないけれど、新しい技術や創意で、人と地域はこれをふたたび「めぐみ」に変える時が来ると思う。今朝はみんなで川や湖にさんざん恨み

節を浴びせたけれど、でも、うちの在所はおかげさまで、と感謝もしながら、うんざりしながら、ぶつぶついいながら、手と口を動かしながら、少しずつもとの浜を取り返していくはずである。琵琶湖のぐるりのあちこちでそうした営みがおこなわれているんだらうな。琵琶湖は神妙に黙っていたので、こつちの浜からあつちの浜へ、みんなで「おーい」と呼びかけてみたいな、とか思った。

「住む」は「澄む」。人びとの「住ム」は土地の「澄ム」ナリ。

（2013年9月22日の「Facebook」への投稿を転載）

またこのあとにこんな「おまけ」も書いている。

それにしても、集落の総仕事というのには、崇高とかストイックとか全然無縁で、さんざん悪態をつきながら、また、各班のしごと具合を横目に見つつ絶妙に手を抜きながら、噂話やなんかしながら作業している様子は、ボランティアで黙々と頑張っておられる方々の姿と



① 伊勢湾台風の後 ② 嬉しそうに薪拾い ③ 春の長曾根 ④ 長曾根水泳場(全て大橋宇三郎コレクション 滋賀県立琵琶湖博物館蔵)

全く対照的で、なんだかなー、と思う。が、この力加減(いざというときの本気とのメリハリ)が、地域の「守り」を数百年継続してきた秘訣なのかもな、とも思うのである。

(出典：前同)

以上で私の言いたいことの大方はお分かり頂けると思うけれど、以下少し言葉を添えておきたいと思う。

私はこれまで滋賀県のあちこちを歩き、地元の人々の語りに耳を傾けた。そこで、地域に根差した生き方や地域文化の中に、未来を生き抜くための知恵や力、想像力の源泉があると実感した。そしてそれを継承し、皆で分かち合いたいと思ひ、いろいろな取り組みを行って来た。その際のスローガンの一つは「過去(思い出)を育てて未来を創る」というものだ。

そういうことを言いながら地域に根差した暮らしについて見聞きするうちに、今度は文化というものについて「地域文化はめぐみのめぐりあわせである」というような標語を思いついた。

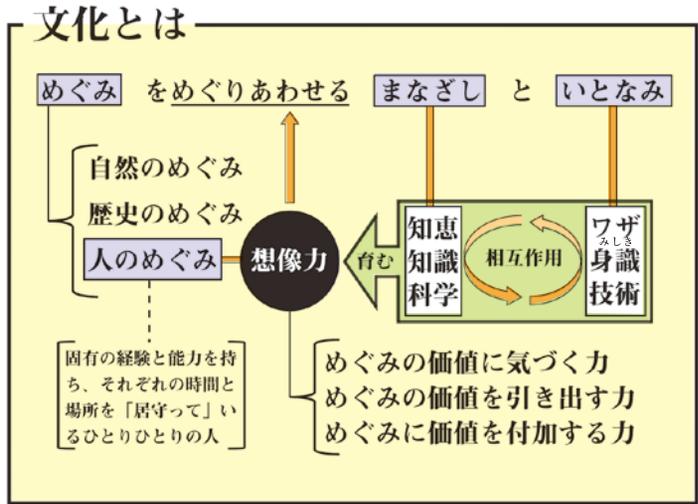


⑤ 現在の浜の眺め(普段)、撮影・筆者 ⑥ 現在の浜の眺め(平成25年9月の18号台風後)
 ※今昔の写真の撮影地点は別々の集落の地先であるが、ほぼひと続きと言ってよい浜辺である。

言葉を足して言う文化とは「めぐみめぐりあわずまなざし」といふ名目である。それでその「めぐみ」というのは大まかに言つて二に「自然のめぐみ」、次に「歴史(時間)のめぐみ」、そして「人のめぐみ」である。「人のめぐみ」はそこに生きている(生きていた)人の存在そのものがめぐみであるということと「めぐみ」の価値に気付き、めぐみの価値を引き出し、めぐみに新たな価値を与える「想像力」を指している。

人間には並外れた「想像力」があるからこそ、自然の中にある様々なモノとモノヤコトとコトとをめぐりあわせ組み合わせる思いがけない新しいモノゴトを創造する。もちろんそのためにはそれを可能にする具体的なワザや技術が無くてはいけない(29ページ図参照)。

人間のもつともめぐまれためぐみであるところの「想像力」の働きにより、「めぐみめぐりあわせて文化を創る」ということを、大昔は大昔なりに、現在は現在なりに、人間はずっと変わらず続けてきた。過去に比べて現代が進歩し優れているような誤解がある。それは科学の



「文化とは」文化の一面を私なりに図化してみた。「居守る」とか「身識」というのは筆者の造語や用法。

を駆使する「いとなみ」によって新しいものを生み出すと
いうことをやっている。

かつて我らの先祖が梅雨
時の句にたくさんやってくる
ニゴロブナという自然のめぐ
みとコメと新鮮な水を桶の
なかでめぐりあわせた上に
半年という時間のめぐみの
力を借りてフナズシという

おいしい文化（財）を創造し
た。その行為と、やっている
ことの基本はなにも変わら
ない。そこに「遅れた」とか
「進んだ」というものさしを
当てても、まあしようがない
のである。

ここで注意すべきは「まな
ざし」と「いとなみ」すなわ
ち「知恵」と「ワザ」とか「科
学」と「技術」というのは、分かちがた
く相互に作用しあって「創造力」やもの
の見方や考え方を育みあるいは規定す
るということ。

例えば知恵分別のない者が極めて切れ

味の良い「名刀正宗（名工がつくった極
めて切れ味のよい銘のある刀）」のよう
なものを手に入れる。技量もなくまた
宝刀の使いどころもわきまえないにな
んだか自分自身が強くえらくなつたよ
うに錯覚して、しまいにも用もないにと
ころかまわずその刀を振りまわして「辻
斬り」という非行蛮行に走る、というよ
うなことは往々にしてある。

知恵分別なきワザも、ワザを伴わな
い知恵も、どちらもよろしくない。ちな
みにこれは科学万能主義の人間の姿を
私なりに風刺しているのだが……。これは
ワザや技術、具体的な生活様式の在り
方が「まなざし」に影響を及ぼす例で
あるが、当然その逆もある。

我々の「まなざし」と「いとなみ」の在
り方によって、さまざままなぐみの値打
ちが見過ごされたり、台無しになるこ
ともある。相互に作用しあう「まなざ
し」と「いとなみ」、その在り方ひとつ
で「めぐみ」は簡単に「ごみ」に変わっ
てしまう。

今度の台風で湖岸に打ちあげられた
大量の流木類は今の私たちの大多数に

時代とも言われる現代の人間は電子顕
微鏡という「まなざし」を獲得して自然
のめぐみを分子レベルで見えるからだ。
そうやって見えるようになった分子と
分子をめぐりあわせる「わざ」や「技術」

は「ゴミ」にしか見えないが、かつてはそれが競いあつても拾いに行きたい「めぐみ」であった。結果、誰が計画するでもなく、誰が号令をかけるでもなく、流れついた枯れ木は持ち去られ、浜はいつのまにか片付いていったのではないか。そこに人が「住む」からこそ、その土地や地域は「澄んで」いったと私には見えた。だから「住ム」ハ「澄ム」ナリ。

同じことは、いうまでもなく、人間と里山とのかかわり、人間と里湖（とりわけ内湖）とのかかわりの上にも言えると思う。「澄む」につながる「住み」かた—それを私は「居る術（いるすべ）」と呼ぶ—今ならさしずめ循環型の暮らしとも言える。つまりその土地の限られた資源を最大限活用しながら生き延びていくために磨き上げられた「まなざし」と、受け継がれ鍛え上げられたワザや「いとなみ」が育んできた文化。そこに「千年居る術」を、私たちの親親そのまた親親はすでに作りあげていた。

「めぐみ」が「ごみ」に化けるまで。この間数十年。毎年毎年台風は変わらずつやってくる。台風ほどでなくとも、風が

吹けば木や葦の枯れ木は吹き寄せられ打ちあげられる。化けると言ったが、流木の、自然の何が変わっただろう。おおよそ何も変わっていない。ただ我々のまなざし、そのまなざしにかかわる暮らしが変わったのである。

インフラが整い、技術が発展し、電気ガス、水道が普及するとともに、暮らしは格段に便利になった。その便利さをもたらずものは、自分たちの身近な自然の中からではなく、自分たちの知らない遠いところで確保されつくられるものになった。はるばる運ばれてくるもののシステムや技術は私たち一人一人はもちろん、小さな集落くらいでは手におえないような複雑で重厚長大なものになった。

その重厚長大なものに支払うお金さえあれば、いつでも欲しい時に、欲しいだけ手に入るようになった。そうなること、限られた、多くの場合はギリギリの資源の確保についていつも心配しながら、多大な労力を払ってきた。私たちは、そうした苦労から解放されるわけで、もはや湖岸の流木のようなものに目を

もはや湖岸の流木のようなものに目を向けなくなるのは道理である。

地域の、足元の「めぐみ」に対するまなざしや、それを自分で活かすワザ、想像力は当然鈍る。けれども本当にそれで良いのか。「人ごみから人をとるところが残る（川崎洋）」という詩があるが、現在の私たちの暮らしはこれに近い。エネルギー問題一つとっても、それは当てはまるのではないか。

だからって、そっくり過去に帰りますよ、と言うのではない。この時代にはこの時代の新しい技術もあるのである。「軽薄短小」は我らの真骨頂だ。世界に学べる視野もある。過去の経験に学びつつこの時代の「まなざし」を磨き「わざ」を練る。今私たちが持っている技術のなかで適正なものをきちんと選び、私たちと地域で手に負える（責任のとれる範囲）で導入しながら「めぐみ」めぐりあわせ」れば……

現代の、私たちなりの「居る術」と文化が、「澄む」につながる「住む」のかけがえが、組み立てられるはずだ。浜辺の「ゴミ」はバイオマス燃料にならないか？



草津市渋川・風景の記憶絵より抜粋(ふるさと絵屏風)

なるだろう。現に「この流木薪ストーブにどうぞ」と言えば、よるこんで拾いに来る人があるかもしれない。ひよっとして、BDF(バイオディーゼル燃料)の原料になるかもしれないぬ。そこには新たな「澄む」につながるビジネスだって生まれるかもしれない。ただ人間は現金だからこの「ごみ」が「めぐみ」であったと気付くやそこにまた葛藤が生じるだろう。知恵の働かせどころである。

「住ム」ハ「澄ム」ナリ。我々が生きている地域で我々の親親そのまた親親が成し遂げていたことにも学びつつ、いまの「まなざし」「いまの「わざ」」を駆使してそれを育てる。想像力をたくましくして、身近な「めぐみをめぐりあわせて」新しい地域を、文化をつくっていく。

「住ム」ハ「澄ム」ナリ。
上田洋平

●つえだ よつへい 京都府生まれ。滋賀県在住。専門は地域文化学。「知恵の知産知消」を掲げ、風土に根ざした暮らしと文化に関する研究と実践に取り組み。「ふるさと絵屏風」と名づけた絵図の制作による地域づくりを提唱・実践。滋賀大学非常勤講師。滋賀県新規採用職員研修「近江地元学研修」アドバイザー。米原市「ルツチ大学」アドバイザー。美の滋賀ネット推進委員会委員長。滋賀県観光事業審議会委員。滋賀県生物多様性地域戦略ファシリテーター。特定非営利活動法人碧いびわ湖理事。2011年度日本青年会議所「人間力大賞」受賞。

●対談

**熊野 英介**アマタホールディングス株式会社
代表取締役会長兼社長**森 建司**

循環型社会システム研究所 代表

〈ほほえみで昭和の暮らし〉

「もったいない」の事業化で 世の中を変える！

熊野英介さんが率いるアマタグループは、事業を通して世の中を持続可能な循環型社会に変えていこうとさまざまな先進的な取り組みを行っています。「もったいない」の発想から生まれた幅広い事業、価格競争から脱するための模索、「文化的資本主義」という考え方など、試行錯誤の軌跡と熱い思いを縦横無尽に語っていただきました。

■アマタホールディングス株式会社 本社(京都市)

■2013年9月30日

「もったいない」を事業化

森 本当の幸福とは何なのか、経済に代わるものは何なのか、その方向を探りながらアミタホールディングスを経営してこられた実績のある熊野会長に、今日は大いに語っていただきたいと考え

ております。アミタグループは非常に幅広い事業展開をしておりますね。まず、どのような事業をされているのかお話しただけませんか。

熊野 森代表は幅が広いとおっしゃられました。実は一つのことしかやっていないんですよ。これは「M・O・H通信」

につながるのですが、「もったいない」、つまり世の中の未利用資源をどう活用するか、という仕事しかしていません。

第一は「山里のもったいない」。これは森林内に

に打ち捨てられている間伐材の林地残材や、かつての薪炭林で今は使い道がなくて放置されている山はもったいないと思います。どう活用するかを考えました。林地残材を搬出してバージンパルプの原料にしたり、ペレット化してエネルギーとして利用したり。放置

された山に牛を放して「森林酪農」という手法で「環境にいい牛乳」というブランドینگで売り出したり。また、地域には埋もれた価値も多くあります。例えば田園で暮らす生きものたちは、その存在すらなかなか意識されません。そこで、生きものたちの魅力を紹介しつつ、水田に魚道やビオトープをつくり、農家との共生関係をお米の付加価値化につなげる支援サービスを続けています。滋賀県の高島市でそれが「生きもの田んぼ米」というブランド米になっています。

森 「生きもの田んぼ米」というネーミングもいいですね。

熊野 「コウノトリ米」とか「トキ米」のように、スターがないとブランドイングができないと一般には考えられています。私は、「凡人集まりて非凡を成す」という夢を持っているんですよ。一つ一つはささやかな生きものでも、それぞれの関係性の中でかけがえのない生態系を育んでいることを示す名称だと思えます。

蜜の時期になると、高島のあの辺りは小川だけでなく田んぼまで蜜で光ります。

(熊野氏⊕ 森氏⊕)



京都の町家がアマタホールディングスの事務所。静けさの中に篤い思いの両名。

地元の人たちもそれを見に行くそうです。そういう風に「無形性の値打ち」を上げています。

森 山里以外もやっておられますよね？

熊野 はい。第二は「産業のもったいない」。例えば、エネルギーになるものを捨てているのはもったいないので、それ

物といわれるものを分析すると資源化できるものがいっぱいある。それを私たちは「地上資源」と呼んで、35年以上、再資源化の事業を行っています。

森 そして、さらにもう一步踏みこんだのが「社会のもったいない」。

森 社会のもったいないというとは？

をビジネスにしようと考えました。水分の多い下水や生ゴミを、なぜ重油を焚いて処理しなくてはいけないのか、おかしいと思いませんか。そこで、アマタが指定管理者を勤める京都府の「京丹後市エコエネルギーセンター」では食品残渣といった生ゴミからバイオガスを抽出してエネルギーに変換しています。宮城県の南三陸町では、もともと規模の小さいプラントで、地産地消のエネルギー循環の実証実験を行なっています。ほかに、産業廃棄

熊野 シニアの知識や経験、あるいは障がい者や家庭に入った女性の力などが分散し、パワーを成していないので、それを集合化して何かできないかと考えています。昨年からは、当社で行っている薬草研究を活かしたハーブの無農薬栽培を南三陸で実施しており、その畑では障がい者の人の集中力を活かして害虫駆除や収穫作業をしています。

森 そんな事業もしておられるんですね。

熊野 はい。障がい者雇用を管理するのではなく、障がい者の居場所と出番をどう設計するかを考えています。地域の小規模福祉作業所で働く障がい者の平均賃金が現実的には月7000円くらいといわれていますが、それではおしゃれもできないし美味しいものを食べ、やることもできない。やはり生活するのに最低限必要なレベルの所得がないとだめだと思っています。

私は「自然のもったいない」「産業のもったいない」「社会のもったいない」をどう事業化するか、それしかやっていないんですよ。「もったいない」でなくなったら、私たちは扱いません。

森 そうしたものの事業化に非常に早くから取り組まれたことは驚きです。

脱・価格競争

熊野 私たちの会社では廃棄物のことを「発生品」と呼んでいます。生きものは、インプットして消化できないものは余剰物として体外に出す。そのネガティブな余剰物である発生物を、別の生きものがポジティブな余剰物として取りこみ、その連鎖が生態系をつくっています。自然界ではネガティブな余剰物を出し過ぎてしまつて環境が劣化した場合、関係している生物が一挙に死ぬというのが摂理です。

けれども人間は約170年前の産業革命以降、経済の余剰物について地球の治癒力に頼り切つて「地球がなんとかしてくれるだろう」と考えてきた。地球の利子で人間は活動していかなくてはいけないのに、元本にまで手を付けて、なおかつさらに汚しているという状態なんです。

森 おっしゃる通りです。

熊野 18世紀半ばに産業革命が起きて



ハーブのトウキを無農薬で育てる南三陸の女性たち



南三陸で無農薬のササニシキを収穫する農家さん

生産力が上がることで世界の人口はどんどん増えてきました。産業革命当時7億人が、今は70億を超えています。人口が増えて繁栄する一方で、人類が息する環境はどんどん劣化している。だから「もったいない」をビジネスにすること、つまりネガティブな余剰物をポジティブな余剰物に変容させていくビジネスは流行ではなく必然だろうと思います。森 もったいないを事業化されたのはいつ頃ですか？

熊野 儲からなくても損さえしなければ、その事業を持続的にしていけるはずだと覚悟を決めて始めたのが1990年です。

森 それまでは何を？

熊野 それ以前は、「都市鉱山」と呼ばれて最近注目されているレアアースやプラスチックメタルの回収を早くからやっていました。ところが、いったんマーケットができる谁也やれるんですよ。誰でもやれることで競争力を増そうとすると価格競争しかない…。

森 そう、価格競争になつてしまいます！

熊野 それで、われわれにしかできない方法、まねができない領域というのを探し続けて今日があるんです。

「量から質へ」の転換で 自己矛盾を乗り越える

森 産業がやっていることはもともと自己矛盾があるんだけれども、それが非常に表に出てきたと感じていた時に、熊野会長のお話をインターネットで拝見しました。そういうことを早くから指摘になっていてすごいなと思いました。
熊野 1990年に覚悟を決めて環境の事業をやり始めた時に、私も自己矛盾を抱えてしまったんですよ。

森 熊野会長も自己矛盾を？

熊野 はい。発生品（廃棄物）を100%資源化する、100%資源化できないものは断るという姿勢を貫くために、日本で初めての完全再資源化工場を造ったんです。それが評判になって、パブル後の不景気にもかかわらずすぐに黒字化できました。しかし、他にも展開して欲しいと要望があった時に「廃棄物が



南三陸大盤平放牧地からの遠景



南三陸でベレット製造に関する説明を行うアマタ社員

増えないと自分の会社は大きくならない。本当に環境にいいことをやっているのか？」と疑問を感じて。お客さんは「ゴミにならず資源になるからありがたい」と言ってくれる。でも、いくら100%資源化しても、自分の中で発展する意味がみえなくなりました。

そうした自己矛盾の中で気づいたんです。われわれは地球に負荷をかけないことの一形態として資源化という方法を探っているのであって、これからは「環境リスク低減」を広げていこうと。そこで「量から質へ」という旗を揚げました。それが97年、京都議定書の年でした。

森 「量から質へ」という発想の転換は、われわれ中小企業には参考になります。

熊野 ところが、「量から質へ」という旗を掲げた瞬間に金融ショックが起こり、市場が一気に縮んで銀行も潰れるような時代がきた。社員に対する経営者としての責務と自分のミッションの帳尻をどう合わせるのか…非常に悩みました。結局、腹をくくって東京への本社移転と社名変更を一挙に行い、更に質的拡大モデルでもっと影響力のある仕事をした

という思いで2006年には株式公開を果たしました。

その次のきっかけは「3・11」でした。人間の尊厳を守るために英知を集めて国民国家を作り、資本主義を作つて飢餓貧困を追放した近代国家。その先進国といわれる日本で震災が起きた時、近代国家という社会の仕組みは、人間の尊厳を守つたでしょうか？電気やガスが通らなると、人々は非常に寒いところで耐えなくてはならず、大きな体育館で段ボールに囲まれた生活が何ヶ月も続き、1ヶ月以上もお風呂に入れない人が大勢いた。

日本は世界第3位の経済大国なのに、行政は組織合意と地域合意に奔走して、目の前の人たちに個別対応できない。大企業はリスクを把握することに奔走して即対応できない。現地で実際に活動したのは名もなきボランティアの人々ですよ。それを見て、工業資本と金融資本に根ざした社会で国家基盤と産業基盤は保てないと思いました。

森 今のままの資本主義社会でいいとは思えませんね。資本主義社会が行き

詰まった大きな原因は、大量生産できないとコストダウンができないし品質管理も不十分だし供給体制もとれない。それでは勝ち残れないから、是非でも大量生産をする。そうすると不要なものまでどんどん作つて供給過剰になる。そこで、宣伝をして消費者の目を惑わせて買わせるという方向にどんどん行つてしまった。

大量生産が資本主義を惑わせた(森氏)

熊野 おっしゃるように工業が大量生産をする以上は、市場はどんどん細分化する。その結果、工業技術が発展すればするほど工業資本を劣化させるという自己矛盾に陥つてしまふわけです。森 今のままでは行き詰まるんですよ。熊野 日本は、エネルギー・食料・資源という安全保障の大事な要素を安定的に手に入れる近代のシステムにぶら下がった結果、自分たちではエネルギーも作れない、資源も作れない、食料も作れなくなつてしまった。自分たちがシステムを



使う側にならず、システムに使われる側になつていたことを明らかにしたのが、東日本大震災だったと思います。そこで、我々は、近代システムからの独立宣言として、震災後17日目にあった株主総会で株主に定款変更をお願いして「今後、アマタグループは自然資本と人間関係資本の増幅に資する事業しか行わない」を第一条にあげました。それ以降の2年、その視座で事業を作り替えているところです。

森 まさにソーシャルビジネスの先達です！



地産をデザインして持続可能に(熊野氏)

熊野 例えば今、滋賀県では林業が疲弊

しているけれども、それを林業だけのせいにしてはいけない。林地残材を滋賀の製紙会社で板紙にして、その板紙を県内で梱包材に使用するなど、域内全体での流通の仕組みが必要です。

森 滋賀にある製紙会社は、全国でも非常に珍しいのですが100%古紙を使っているんですよ。しかし、古紙を使うとその時の古紙で色が変わってしまう、最近が開発途上国での紙の需要が増えたために古紙が不足していることなどから、なかなかむずかしいようです。

熊野 それならば100%古紙にこだ

わるより、100%滋賀の林地残材によるパーズンパルプで紙を作る方がよほどいいと思いますよ。

森 そうすると高くなりませんか？

熊野 はい、確かに輸入品より高い。でも、サプライチェーン全体でコストを分散すればそれほど高くないですよ。

森 どういう仕組みなんですか？

熊野 例えば滋賀の林地残材を使った方が5%高いとすると、その5%を県が補助金として林業に出すより、その紙を使う流通に補助をする方が、みんながその紙を使うようになる。それ

によって山にお金が戻って森がきれいになる。その方が税金の使い道としていいと思いますよ。

森 ネガティブな余剰物をポジティブな余剰物に循環させる工業的技術力と社会的技術力が、その地域にある。そういう地産を再構築するデザインがしたいですね。

日本型モデルの「文化的資本主義」

熊野 冷戦以降の20数年間で、金融と工業の破壊力によって世界に格差が生じました。人類は格差にどう向き合うかがこれから20年の一番大きな命題になると思います。

森 おっしゃる通りです！

熊野 近代国家として形成された国民国家がこの格差を修正できるかというところ、むずかしい。では、何が格差を縮めるのか？人類は再び宗教あるいは政治に答えを見いだそうとするでしょう。でも、もう一つ、第三の道がある。それは「文化的資本主義」だと私は考えています。

森 文化的資本主義というのは？

熊野 江戸時代の日本は鎖国をしていたので、俗にいう成長モデルはないわけです。元禄から幕末に至るまで人口は3000万人で抑制されていて、ではその間、経済が停滞したかというところは、ものすごく発展しているんです。職人の数が増え、例えば朝顔や椿は種類がものすごく増えた。江戸時代に

「質的發展モデル」をやっていたわけですね。かんだしを例にとつても、数え切れないほどの種類が作られたのは「価格競争」ではなく「価値競争」をやっていたからです。

森 なるほど価値を競っていたわけだ。

熊野 次の資本主義においては、アートのような「無形性」の競争になると思います。人間の欲望に火をつける方向ではなくて、人間性をキープできるような社会文化的な産業資本主義の成立が格差を縮めていくメカニズムになっていくのではないのでしょうか。

幸せの基準をどこに置くか

熊野 飢餓貧困の追放を人類の最大目的とすると、「幸せの基準」は「消費」と「所有」のパラメーターになります。つまり、たくさん消費できる人、たくさん所有できる人は幸せな人。これの総和がGDPです。でも、今の日本にはたくさん消費してたくさん所有しているけれども孤独な人がいっぱいいる。所有と消費が幸せの基準じゃないと知って

しまった。

森 そうなんですよ！

熊野 では、次にどんな基準があるのかを考えるために、まず20世紀を俯瞰してみましよう。世界の大きなターニングポイント、万博が開催された70年代だったと思います。70年代にスイスのシンクタンク・ローマクラブが報告書「成長の限界」を発表し、ストックホルムの国際会議で「人間環境宣言」が採択され、イギリスの経済学者シューマッハーの『スモールイズビューティフル』やアメリカの社会学者ダニエル・ベルの『脱工業社会の到来』などが次々に出ました。90年代になると、冷戦が終わって軍事問題より経済の方が重要なテーマになりました。経済が最重要になるとアメリカの一人勝ちになってしまう。そこでヨーロッパが市場を担保に出してきたのが「環境」なんです。ローマクラブの『成長の限界』から20数年経ってやっと「環境は経済よりも優先する」と主張したわけです。ところが京都議定書が採択された97年、カレンシーショックという金融ショックが始まって「環境の時代」

はたった5年で終わってしまった。それ以降は「金融の時代」。今、一般に「経済」といつているのは「金融」のことなんです。

森 私はいわゆる金融工学などというのはけしからんと思っています。

熊野 そうなんです。ベトナム戦争が限界になりニクソンショック（1971年）が起きた時点から、兌換制度から離れた「虚」が発生したと私は考えています。「虚」が40年間続いて、ついには金融ショックが起きた。こういう流れを俯瞰してみようのは、人類はまだ実験を続けるのかと。

森 おっしゃる通りです。それではどうすればいいとお考えですか？

熊野 所有と消費の次の基準となるものは何か？ そのヒントはインターネット上の「共感」にあります。インターネットの発達で、血縁・地縁だけに拠らない「無形性の共感」が形成されてきていると思うんです。

人の気持ちが分かる、そして分かち合うという人間の能力に幸せの基準を持つていくと、「共感」と「シェア（共有）」が幸



共感しあえる対談となった

コミュニティの中にいる血のつながりのない子どもや高齢者に、「コミュニティの子ども」「コミュニティのおじいさん・おばあさん」として関われるかということです。昭和の暮らしではこれをやっている、遠くの親戚より近くの他人の方が頼りになった。自分一人で生まれ老いていくリスクを抱えなくてもいいために人間関係の共有がいかに重要か…私たちは知っていたはずなのに個人主義になってリスクが巨大化してしまい、リスクをカ

バーする保険として「収益≒貨幣」がないといけない。そういう行き過ぎた消費と所有を追い求めてしまった。それをもう一度戻す時代に来ていると思います。消費と所有から脱して、共感と共有のパラメーターが幸せの基準だという産業資本主義が日本で構築できるか。今、産業人の性根が問われていると思います。

逃げるな

人類！

熊野英介

●くまの えいすけ 1956年生まれ。スミエイト興産株式会社（現・アミタ株式会社）に入社。1993年、代表取締役就任。廃棄物を地上資源と捉え、100%再資源化を実現する環境ビジネスを展開。それを基点として、企業の環境リスクを低減するコンサルティングサービスや、地域の未活用資源に価値を与える地域資源事業等を手掛ける。他に、公益財団法人信頼資本財団理事長、特定非営利法人アースウォッチ・ジャパン理事、一般社団法人ソーシャルビジネスネットワーク 副代表理事。
 〈著書〉「思考するカンパニー」、「自然産業の世紀」（共著）。

森 今日お話をうかがって、しっかりとした思想をお持ちになって、事業として成功されている。それはソーシャルビジネスなど新時代の手法と現実をしっかりと見ておられるからだと感服しました。これからどんなお仕事されるのか楽しみになっております。ありがとうございます。

●アミタホールディングス株式会社
 TEL: 075-1277-10795
 FAX: 075-1255-14527
<http://www.amita-hd.co.jp>

勇氣凛々
 いのちを打ち破る

森建司

●もりけんじ 1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など。
 〈著書〉「吃音はなある」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎、「中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営」サンライズ出版、「中小企業相談センター事件簿」サンライズ出版。

冬木立

三山 元暎



さし絵:中川 善雄

この季節が巡ってくる、忘れられない思い出が頭をよぎる。

四十年ほど前のまだ若かりし頃、山友と厳冬期に鈴鹿の山へ登ったことがある。

想像を絶する雪だった。家を出るときは青空だったのに、

麓の村を出発する頃には、踝ほどの積雪があった。登るほどに膝までとなり、さらに小一時間も歩くと、腰あたりまでの雪となった。一メートル先を歩く仲間の足跡を見失うばかりの降りようで、みるみるうちに胸を越すようになった。あまりのすさまじさに、身の危険を感じ、慌てて下山したのを昨日のことのように思い出す。里では考えられないような雪の怖さであった。

さすがにこの歳になると、

このこともあり、積雪期に山へ入ることはないが、晩秋から初冬にかけてのよく晴れた日には、湖北の里山を歩くことがある。なんといってもこの季節の魅力は、冬木立が美しいことだ。いくら見ても見あきることがない。

杉や檜の林を抜けて、クヌギやコナラ、ミズナラ、ブナなど広葉樹の奥山へ分け入ると、葉という葉をふるい落とした木々が、裸の姿で立ち並んでいる。そこには荒涼感とともに大自然の気が漲っていて、無限の美を見出すことができる。一本一本の木は、眠りながらも、小さな芽をつけ、冬を越そうとしているのがわかる。

枯れゆけばおのれ光りぬ

冬木みな

楸廊

空にくひ込んで冬木と

いう力 金田志津枝

晩秋から初冬にかけての山歩きのもう一つの楽しみは、立ち枯れた古木に群生した遅花がけの野生のナメコに出会うことができることだ。キノコ採りの冥利につきる瞬間だ。

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前住職。

悠々自適

中川 善雄

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

「流域治水」ってなあに？

～ どうすれば水害から身を守れるの？ ～

もう爺さん

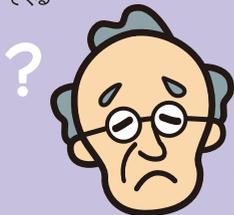
淡海家のおじいさん。みんながもったいないことをしていると、「もう～」とやってくる…

いぶきくん

淡海家の長男いぶきくんは、小学5年生の元気な男の子。いつも「もう爺さん」に叱られている。

びわこちゃん

いぶきくんの妹、びわこちゃんはしっかりもの小学3年生。



おかあさん

いぶきくんとびわこちゃんのおかあさん。少々あわてものだが、明るく元気。家庭菜園で野菜作りが趣味。



おとうさん

いぶきくんとびわこちゃんのお父さん。料理や洗濯をすると、もったいないやり方をしてしまう。

地球の気候変動が激しい今日この頃、各地では、突発的な台風や大雨で未曾有の被害が起きています。滋賀県では、かねてより治水事業に力を注いできました。しかし、行政による河川整備だけでは、完全ではありません。河川で流せる量を超える大雨が降った場合、河川は氾濫する可能性があります。

滋賀県では、大雨が降った場合に浸水する可能性のある地域を示した「地先の安全度マップ」を作成し、これを基に「もしも」のときに、住民一人ひとりが自らの命を守るための対策を考えようとしています。それが流域治水政策です。

今回は、もう爺さん一家と一緒に流域治水政策の内容を考えてみましょう。

協力：滋賀県流域治水政策室

治水に完全はありえない



整備前

草津川(天井川の平地化)

河川やダムの整備がすすみ、水害は減りました



整備後

姉川ダム



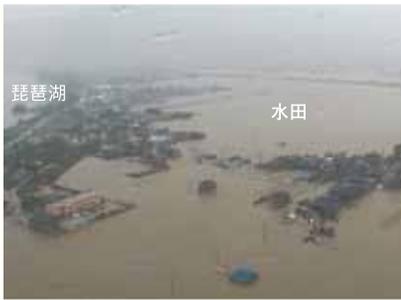
これでも、滋賀県では、昔と比べたら水害は少なくなっただよ



この間の台風18号はものすごい量の雨だったね



川の水が溢れて水に浸かった家もあつたわね。怖かった



琵琶湖

水田

平成25年台風18号 鴨川右岸浸水状況(高島市)



いいや。川の工事をして



じゃあ、水害はもう起こらないの？



滋賀県は、短く急峻な河川や天井川が多く、昔から水害に悩まされてきたんじゃ。そこで、最近では川の工事やダム作りがすすんで、川は溢れにくくなっておるんじゃ。



じゃあ、水害はもう起こらないの？



自然は人間の予想を上回る雨を降らせることがあるんじゃよ。だから河川の整備だけでは万全ではないんじゃ。



今後、地球の気候変動で、豪雨災害の増加が心配されているんだよ。



昔と比べて、激しい雨が



増えているの？



気象庁によると激しい雨の降る頻度はここ40年くらいの間に3割も増えているそうよ。



つまり、台風18号並の大雨が再発する可能性があるんだ。

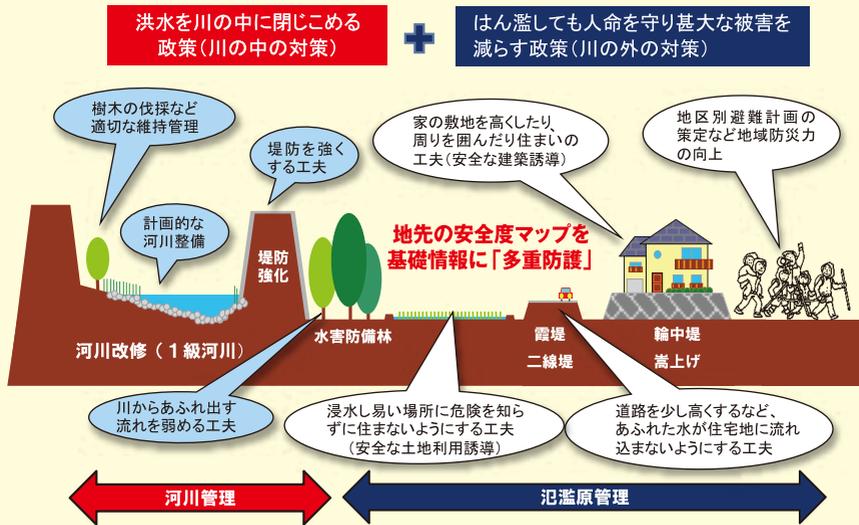
じゃあ、また川が溢れて家が水に浸かることがあるの？

河川があふれても、命が助かる方法はあるのかな？



想定外の自然災害から命を守るためには、あらゆる方法で被害を防ぐ「多重防護」が必要なんじゃ

滋賀の流域治水政策の概念図 河川管理と氾濫原管理



滋賀県が進める「流域治水」

～地域性を考慮した総合的な治水対策の展開～

目的	① どのような洪水にあっても、人命が失われることを避ける(最優先) ② 床上浸水などの、生活再建が困難となる被害を避ける		
手段	川の中の対策(堤外地対策)だけではなく、「ためる」「とどめる」「そなえる」対策(堤内地での対策)を総合的に実施する。		
河道内で洪水を安全に流下させる対策(これまでの対策)	ながす	河川改修工事、治水ダム建設など	
流域貯留対策(河川への流入量を減らす)	ためる	森林および農地の保全 グラウンドでの雨水貯留など	
氾濫原減災対策(氾濫流を制御・誘導する)	とどめる	輪中堤、二線堤、霞堤、水害防備林、土地利用規制、耐水化建築など	
地域防災力向上対策	そなえる	防災訓練、防災教育、防災情報の発信、水害履歴の調査・公表など	



このように水害から命を守るためのあらゆる対策をとろうとするのが「流域治水」なんじゃ。
5つの章にわけて流域治水の内容について見てみよう

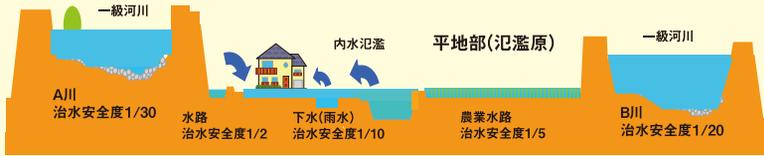
ち さ き

「地先の安全度マップ」ってなに？



水はいろいろな形で私たちの生活の中を流れているね

大きな河川だけでなく、下水道や農業用排水路などの身近な水路の氾濫なども予測した浸水予測マップじゃよ



水はいろいろな形で私たちの生活の中を流れています。大雨時は、身近な水路→中小河川→大河川の順にあふれるおそれがあります。



「地先の安全度マップ」滋賀県庁周辺部を抜粋
見たい場所を拡大して見ることができます
URL:<http://www.pref.shiga.lg.jp/bousai/index.html/>

大きな川だけじゃないわね。小さな川や田んぼや家の近所の水路もあるわね。

大雨が降れば、そんな身近な水路が氾濫するね、さらに大きな川も氾濫するね。

そうね、でも、どこで、どのような被害が、

どのくらいの頻度で起こるのかしら？

その情報を地図に表したのが『地先の安全度マップ』だよ。

これだと、浸水のリスクがひとめで見えるわね！

僕たちの家のある場所に色がついているよ。

つまり、洪水のとき、我家は浸水するおそれがあるってことだよ。

どこに避難したらいいのかな。

氾濫した水路を越えて、うまく逃げられるかしら。



このマップを使って、命を守るために、どんなときに何をすればいいの？一緒に考えよう！

「ながす対策」ってどんなこと？

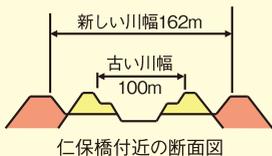


川幅を広げる工事をすれば、川にたくさんのお水が流れるようになり、あふれにくくなるんだ

洪水を防ぐために、降った雨を河川で安全に「ながす」対策（河川整備）が最も重要じゃ。県は河川整備に計画的・効果的に取り組むこととしてあるんじゃ



日野川では、工事の結果、1.3倍の水を流せるようになりました



川の中に堆積した土砂を取り除くことで洪水が起こりにくくなります。



大戸川

ね。川の中に溜まった土砂をとり、生えた木を切って川の流れる邪魔しない環境を作るんだ。

川のメンテナンスも必要

滋賀県では、平成25年度、河川整備の予算として77億円確保しているんだ。それだけ、重要な事業だということね。



河川整備は洪水を防ぐ土台となる対策なんじゃ。『地先の安全度マップ』をもとに、河川整備の計画に反映してあるぞ。

「ためる対策」ってどんなこと？



水やりに使う



雨を集める



地下のタンクに貯める

河川や水路に水を流せる量には限界がある。そこで、公園やグラウンドや建物に、降った雨を一時的に「ためる」と、川の負担を軽くできるぞ



【タンクに雨水をためる取り組み例】



滋賀県南部合同庁舎における雨水貯留タンク(草津市)



高時小学校(長浜市)のビオトープ兼用の雨水貯蔵施設



野球場のグラウンドや屋根に降った雨水を地下のタンクに集めてためている(大津市皇子山球場)



ばいいわね。

植物の水やりに使え



ためた水は、

るね。

んなでやればたくさん
の水量をためられ



は少しの量しか水を

つ置くとかね。



た例えば、各家庭で、
庭に雨水タンクを1

ね。

ことができればいいの



水をどこかにためる

ているぞうだ。

水が起こりやすくなっ

む水の量が増え、洪

地表から川に流れ込

て、昔より短時間に

みにくい場所が増え



屋根や舗装道

路など、雨がしみ込



みんなができる範囲で少しずつ雨水をためて、
川の負担を軽くしよう！

「そなえる対策」ってどんなこと？

みんなで地図を囲んで話し合いをしているわ。

まずは、「地先の安全度マップ」で浸水の危険度を確認して、避難計画を検討するんだ。



住民によるハザードマップ検討の様子

洪水が起こりそうになった時、どんな行動をとればいいの？



県内各地では、『地先の安全度マップ』を基に、避難体制など水害に『そなえる対策』を検討してあるんじや。『水害に強い地域づくり協議会』の場で話し合っつて、みんなと一緒に水害に備えたまちづくりを進めるぞ。

子供たちが水路を測っているわ。

ガードレールがないから、洪水の時は危ないね！

こっやって通学路や避難経路を確認しているのね。



子供たちが避難経路を調査し、安全確認をしています

住まい方のルールだね。

私たち住民も常日頃から『そなえる対策』に取り組むことが不可欠だわ。

昔の洪水では、こんなに高いところまで水が来たこともあるんだね。

こういう場所では、洪水に備えて確実に避難できる避難場所の確保と万一の時の行動が必要だな。



過去の洪水時の水の高さを電柱に示し、次世代に伝承しているよ



この『そなえる対策』と、次に紹介する『とどめる対策』の両輪があって初めて地域の安全度は高まるんじや

「とどめる対策」ってどんなこと？



それが、『安全な住まい方のルール化』すなわち「とどめる」対策じゃ

逃げ遅れても、命を守る方法はあるのかしら？



どんなに備えていても、想定外の大量の水が起きたら逃げ遅れるかも…



昭和34年伊勢湾台風で浸水した家屋、近江八幡市の干拓地

どんなに整備をしても、水害リスクが残る地域があるのね。
昔は、そのような地域は水田などに利用されていたんだ。
河川整備が進んで小さな雨では氾濫しなくなっただけど、大きな雨での氾濫リスクは残っているのね。



水害リスクが残る土地は水田として利用されてきた

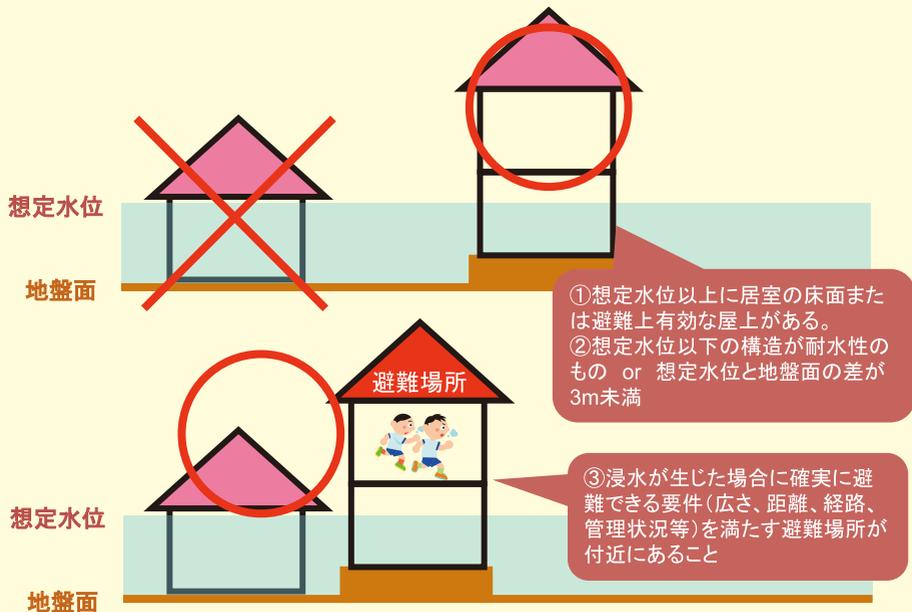
平屋の建物は、軒下まで水没していいね。
浸水しても、2階建ての家だと2階の部屋に避難ができるね。
安全な住まい方のルール『建築制限』も必要だね。

安全な住まい方のルール『建築制限』とは？

建築制限とは、水害リスクの高い地域で新築・増改築される場合、県が水害リスクに対する安全性適合の確認をする制度のことだよ。

建築物を建ててはいけないということではないし、既に建っている建築物への制限ではないよ。しっかりと理解しないといけないね。

安全性確認の手続きが必要となる区域は、県が「地先の安全度マップ」をもとに設定するんだ。想定水位も明示されるよ。もちろん、区域の指定は、対象区域の住民の方と十分な話し合いをしてから設定されるんだ。
左図のように、想定水位以上に2階の床面があるとか、浸水が始まってからでも逃げ込める避難場所が家の近くにあるなどの条件を満たすことが必要だよ。



建築制限とは、県が①～③の内容を確認する制度のことです。



手続きが必要な区域に指定されても、
いまままであり住み続けていいんじや。
ただし、新築・建て替え時には、もしも
のときに避難できる住まいにしよう。さ
らに、この区域では重点的に『そなえる
対策』に取組んでいくぞ！



第3回よばれやんせ湖北～生産者消費者交流会～ 『地産地消してますか?』

◆日 時/2013年11月17日(日) 10:30～15:00

◆場 所/長浜バイオ大学 食堂(長浜市田村)

◆生産者/鮎茶屋、梅花亭、あやべとうふ店、近江牛本家まるさ、伊吹ファーム、ウッディパ
ル余呉、三姉妹本舗、カレーハウスCoCo壱番屋、湖北ええもんづくり本舗、赤いエプロン、
富久や、おうぎ、吉田農園、木元製菓舗、NPOまちづくりびわ、近江の館、菓匠禄兵衛

◆主 催/よばれやんせ湖北実行委員会

(長浜み～な編集室、(株)富久や、(特非)環人ネット、(株)ロハス余呉、M・O・H通信、(特非)木野環境)

◆協 力/長浜バイオ大学、(一社)バイオビジネス創出研究会、長浜地方卸売市場(株)、朝
日漁業組合、(株)びわ鮎センター、滋賀咲くブログ、新江州(株)、パイン(株)

※長浜市市民活動団体支援事業の助成をいただいています

◆後 援/長浜市、滋賀グリーン購入ネット
ワーク

◆内 容/

- ①バイオ技術での地域貢献 ●松島三兒氏(長浜
バイオ大学)
- ②地産地消パネルディスカッション
進行 ●辻村琴美氏(M・O・H通信編集長)
パネリスト ●中嶋玉樹氏(近江牛本家まるさ)
●小柳芳恵氏(赤いエプロン)
●金森弘和氏(富久や)
- ③地産地消、滋賀県産品の発信・育成
●嘉田由紀子氏(滋賀県知事)
- ④歓迎・いただきます ●藤井勇治氏(長浜市長)
- ⑤作り手との交流・試食会
- ⑥大抽選会
- ⑦閉会 ●森建司氏(循環型社会システム研究所代表)
- ⑧直売

◆参加者の声◆

- ◆ これからも発信し続けてください
- ◆ もっと多くの人に知ってほしい
- ◆ 知事が先頭に立って農水産業の振興に
取り組んでおられることに感動した
- ◆ 食には土地柄があり物語と心があると教
えられた
- ◆ 多くの人がかんばっていてよかった
- ◆ ビワマスのこけら寿司販売してほしい
- ◆ いっぱいの商品があったが他の物品も買
いたい
- ◆ 厚揚げ食べたい
- ◆ 来年も来よう
- ◆ 生産者同志で交流できた
- ◆ 商品や店をたくさんの人に知ってもらえた
- ◆ 商品に工夫が必要だと分かった

目の前にびわ湖を望むロケーションの長浜バイオ大学の食堂で「第3回よばれやんせ湖北」が開催された(昨年、一昨年は湖北町・尾上漁業会館で開催)。湖北地方で、ものづくりに取り組む生産者とそれを応援したいという思いを持つ消費者が一堂に会し、その特産品を頂きながら生産者の声や湖北の食材の素晴らしさを、地元はもちろん県内外に伝えようと始まった。

午前は、松島教授より長浜バイオ大学の地域連携の取組とバイオ技術による地産品へのアプローチの紹介、生産者によるパネルディスカッション、基調講演として、嘉田由紀子滋賀県知事より豊かな農産品の背景にある湖北地方や滋賀県の良さ、地産地消により地域の農や産業を支える大切さを紹介いただいた。

112名の参加者のうち県外(京阪神・中京)からの参加は約半数にも上る。地域内外からの参加者が湖北地方の良さを感ぜられるような内容となった。



1



3



4



2

1 全員で記念撮影。たくさんのご参加、ありがとうございます！ 2 湖北のええもん、大集合 3 講演会で湖北の良さを再発見
4 地産の恵みをかみしめて

試食会は藤井長浜市長の「いただきます」の発声でスタート。参加者はブース形式の会場を自由に動き、それぞれ生産者とのふれあいを楽しむとともに、こだわりの詰まった特産品の試食に満足していた。参加者にはリピーターも多く、お目当ての生産者の話を聞きに来た、という人も少なくない。

当イベントは、滋賀県の湖北地方に伝わる伝統料理、また新たに開発されている特産品、丹精込めて作られた食材等を味わっていただき、生産者との交流から、その思いやこだわりに触れてもらうことで、ファンづくり・口コミによるPRにつなげ、地産地消の促進を目指している。生産者にとっても、消費者の声を直に聞くことからモチベーションや技術向上に繋がることが期待される。

来年は郷土料理で開催予定。まだ来たことがない人も、リピーターの人も、湖北のええもんよばれにきやんせの(口)上が(口)来(口)くれん！

なでしこ滋賀ネット 『食hana咲かそう!』開催しました

〈第1回〉

- ◆日 時/2013年9月26日(木) 13:00~15:30
- ◆場 所/体験型観光農園ローザンベリー多和田 園内研修室(米原市)
- ◆内 容/13:00 【講演】農業の明るい未来を考えよう
●中村貴子氏(京都府立大学 講師, 農業経営学)
- 14:00 【グループワーク】“食”の未来は?みんなで話そう!
“食”について、次世代に「のこすもの」「のこしたいもの」「のこせないかもしれないもの」を話してみましよう
- 15:10 グループワークの意見共有
- 15:30 閉会

〈第2回〉

- ◆日 時/2013年11月19日(火) 14:00~17:00
- ◆場 所/成安造形大学内 カフェテリア「結」紀伊國屋(大津市)
- ◆内 容/14:10 【講演】農業女性のネットワークが持つ力
●安倍澄子氏(社団法人農山漁村女性・生活活動支援協会)
- 15:10 休憩&おやつタイム さつまいもモンブラン
- 15:20 【座談会】【コーディネーター】中村貴子氏(京都府立大学)
【話者】●岩田康子氏(ブルーベリーフィールズ紀伊國屋) ●池田喜久子氏(池田牧場) ●大澤恵理子氏(ローザンベリー多和田) ●菊池玲奈氏(結・社会デザイン事務所/セトレ マリーナびわ湖 企画ディレクター)
- 17:00 閉会
- ◆主 催/なでしこファーマーズ

<第1回>①「道の駅がおもしろい」中村氏 ②羊、収穫、クラフト。ここに来れば何かがつくれるローザンベリー多和田 ③「おもしろかったねえ」



次回イベント告知

2014年2月15日(土)

テーマ:「湖国の滋味」

滋賀の食材をめぐり合わせて、シェフが腕によりをかけて作った「滋賀のめぐみコース」を食していただきます。

場所:セトレマリーナびわ湖

(<http://www.hotelsetre-biwako.com/>)

〒524-0102 滋賀県守山市水保町1380

詳細はなでしこ滋賀ネットfacebookページ

(<https://www.facebook.com/nadeshiko.farmer.shiga>)

やM・O・H通信ブログ

(<http://moh.shiga-saku.net/>)で

ご案内します。





2



1



4



3

<第2回> ①「結」からびわ湖が望める。対岸は三上山 ② 県産材を使い、ストローベイル(麦わらと土で作られた壁)のある「結」紀伊国屋 ③ 安倍先生を中心に女性の生き方を語る ④「何かができる予感」

これからは、恋バナならぬ「食hana(じょくばな)」！ 食について話す交流会が、9月26日にローザンベリー多和田(米原市)と、11月19日に成安造形大学内カフェテリア「結」紀伊国屋(大津市)で行われた。

第1回では京都府立大学の中村先生から「農業の明るい未来に向けて女性起業のパワーに期待したい」とエールが送られ、グルーブワークでは次世代の「食」について話しあい、発表した。輸入食品に頼りすぎる生活は残したくないという意見や、郷土料理や家族と一緒に食事をする時間を残していきたいという意見が出た。

第2回では農山漁村女性・生活活動支援協会の安倍先生より、農業に関するデータ解説とともに「農業女性が持つ、斜めのネットワーク」や地域資源を活かす「ものがたり商品(歴史などのストーリー性を持つ商品)」をつかって地元根を置いたネットワーク

システムをつくってほしい」と講演いただいた。その後の座談会では、滋賀を代表する4名の女性経営者の農業を始めたきっかけやこだわり、想いを聞き、次世代育成へ向けた当ネットワークの役割を共有した。

両イベントとも男性の参加もあり、「女性の感性を活かしていく必要がある」、「女性のパワーに期待したい」と女性を応援する声が聞かれた。

滋賀県を中心に、農・林・漁業やそれらを支える事業に携わる人々のネットワークづくりから、交流会等の実施によって、農・林・漁業を盛り立て、心と身体と暮らしの本質的な豊かさづくりを目指す「なでしこファーマーズ」。弊誌編集長が会長を務める。只今、会員募集中！老若男女、個人団体問わず、一緒に歩んでくださる方、お待ちしております。

● 問い合わせ/申込先
なでしこファーマーズ事務局(担当:北井)
mailto:nai@nookoo.com
mailto:info@nookoo.com
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町
759-3
TEL:090-4114-3239
FAX:0749-72-8681

美の滋賀語り部マイ★スターになろう!

『美の滋賀語り部マイスター』養成講座



「石久仏壇店」清水喜代美社長から説明

「滋賀の美しさとは？」この講座にあたって改めて考えた。滋賀県が全国に誇る文化財、暮らしが築き上げた文化的景観。「近江商人」のお屋敷の風情。このごろは滋賀の各地でそんな在地の魅力を伝える取り組みが多く行われていて、各地域の人たちが「地元の魅力」を発信し始めている。

その機運はますます高まるだろうとの

〈第1回〉

「発信の仕方と滋賀の魅力を知ろう!」

- ◆日 時/2013年10月27日(日) 14:00~18:30
- ◆場 所/ええラジオ京町スタジオ(大津市)
- ◆内 容/14:15 【講座1】話し方・伝え方を知る
 - 豊田一美氏(a-radio~ええラジオ~)
- 15:30 【講座2】近江の神仏一祈りの至宝一
 - 井上ひろ美氏(琵琶湖文化館 学芸員)
- 17:00 【講座3】大阪人から見た“近江の魅力”
 - 中井均氏(滋賀県立大学 教授)
- 18:00 意見交換
- 18:30 終了

〈第2回〉

「滋賀に根付く、暮らしの美を知ろう!」

- ◆日 時/2013年11月24日(日) 13:00~16:00
- ◆場 所/米原市上丹生
- ◆内 容/13:00 上丹生まちあるき
 - 14:30 【講座】千年居る術—the art of being—
 - 上田洋平氏(滋賀県立大学 助教)
 - 15:30 意見交換
 - 16:00 終了
- ◆主 催/NPO環人ネット

予想から、もつと発信できる人を増やしたいと「美の滋賀語り部マイ★スター養成講座」を始めた。全4回の講座で「滋賀の魅力」「暮らしの美」「街並の美」「文化の美」の4つを学ぶ。

第1回目はラジオDJ「豊パバ」こと豊田一美さんが講師となり、話し方・伝え方を学ぶ講座。そして琵琶湖文化館から井上ひろ美さんによる文化財についての講座と滋賀県立大学の中井均さんから「大阪人から見た滋賀の魅力」を聞いた。

参加者は県内各地から、地元発信に努める人々が集い、豪華な講座を堪能。語り部としての発信力を身に付けるための豊パバの講座は、普段意識せずに話していた自分の話し方や発声・発音のクセや弱点をしっかりと認識する時間になった。みなさんも、ぜひ一度、ゆっくりきちんと「あいづえおかきくけこ…」と発音して確認してみよう。

井上さん、中井さんからのお話では、研究者の視点から見た滋賀県の文化的な特徴や注目点を教わる。仏教の研究や各文化財、城郭研究、それぞれの分野において興味深い特徴を持つのが滋賀県



ふるさと絵屏風の絵解き中



ふるさとの里山は1000年前と変わらぬたずまい



木を柱にしたツリーハウスは7mの高さ

次回イベント告知

第3回「各地に光る、街並みの美を知ろう！」

2014年1月12日(日) 13:00~16:00

- 講師：濱崎一志氏（滋賀県立大学 教授）
- 場所：近江八幡市立資料館前へ集合
（近江八幡市新町2丁目22）

第4回「時が紡ぐ、文化の美を知ろう！」

2014年2月9日(日) 13:00~16:00

- 講師：大沼 芳幸 氏（滋賀県立安土城考古博物館 副館長）
- 場所：高島市マキノ町海津

申し込み・問い合わせ

NPO環人ネット

所在地：〒521-1101 彦根市石寺町1263 番地
（事業担当：北井）

申込連絡先

TEL 090-4114-3239 FAX: 0749-72-8681

Mail : oubo@kino-eco.or.jp

なのだとか。貴重な文化財があるのはわかっていたが、分野の中での特色などをふまえて聞くことで、改めて貴重さや面白みについての理解が深まるものだ。これで地域のお寺や仏像をもっと力を込めてアピールできるかもしれない。

第2回目「暮らしの美」は冬を目前にした米原市上丹生集落を舞台に、滋賀県立大学の上田洋平さんにご案内いただいた。木彫や彫金の職人の村である上丹生では、豪華な浜仏壇を目の前に上丹生の



小指の豆が職人の証しとか…

技を伺い、職人の繊細な感覚をまざまざと知った。地元の地域づくりに活躍されている「プロジェクトK」が作られたツリーハウスや炭焼き小屋を見学し、昔の暮らしを屏風絵に表した「ふるさと絵図」を前にすると、現在から過去の上丹生を知ったよつで地域の古老ともいとも簡単にうち解ける。1000年続いできた営みが作り出す地域の美しさ、語り尽くせぬ深遠な魅力を感じる1日となった。（ちなみに時絵師を募集とか）

滋賀の魅力の背景をどっぶり知れる本講座はあと2回。知れば知るほど奥深い滋賀の美にぜひ触れていただきたい。

※写真は第2回の模様です

山暮らし子育て日記

作オムニキ 

オムニキは子どもの頃から、ずるそばが好き。



5歳のとき、将来、そば屋になりたいと思っていた。

くつぎおのちのそば屋、朽木大野区のそば屋「永昌庵」のそばは、はきりきって、ウマイ。

特に好きなのは、冷たいおろしそば。



大根 おろし

これ一杯でお腹一杯、もちろん温かいそばもおいしいけれど、メニューは少ない。

限定されてるってところが、カッコイイのだ。

そばを打っているのは、石川日出男さん。



大津市坂本で修業し、993年に朽木で店を出た。

店の奥でひたすらそば作りしているらしく、オムニキもお目にかかったことがほとんどない。

表の仕事は奥様の万美子さん。



二人で20年間、お店を営んできました。

元気ハッラン活動的で、お玉があちうって感じ。

長女 千紗さん、長男 大貴さん

母店当時、小学3年生で長丁だ。子どもたち。

休日も親は仕事だし、運動会も来られない。



家族旅行は正月の帰省みだったとか。

でも、えんげもんごとく思っていたし、特にさみしい思いはしなかった。

という大貴さん、親が果敢命だ。ち。んと子どもにはわかるのね。

大貴さんは大学卒業後、そば屋を継ぐべく修業中。



オムニキとの辛い日々を
乗り越えて手に入れた
若おかずの座。

いっしょに
いっしょに

今年、はまきがはじめて
今度は姑さんに
ココキ使われてる...?

ってことなく、
和気あいあいと勤めたよ。
もっと
もっと
もっと

永昌庵のそばは、北海道

産のそば粉とつなぎに小麦粉を使っています。その割合は気温や湿度など合わせて、その時のベストな状態になるように、日出男さんの好みで変えているそうです。そばの他、そばの実の入ったお餅を揚げた「そばもちあげ」や板餅を使った「とちぜんざい」や「とちかっちゃん(冬期のみ)」という朽木らしいメニューもあります。休日はこちらも平日でも昼時は満席になることも。万美子さんは常連さんが入って来たと同時に注文するものがわかるとか。そんな姑さんを見ながら「私はまだまだです」という由貴枝ちゃん。彼女が朽木

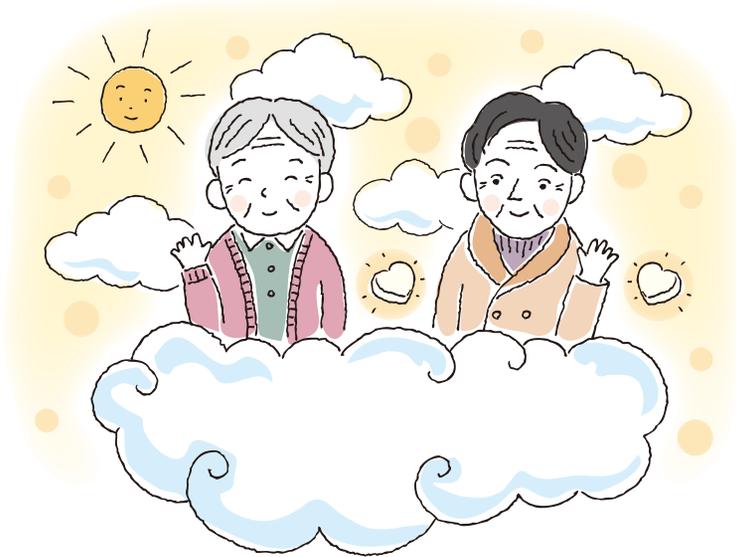
に来たきっかけは、「緑のふるさと協力隊」というNPOの隊員として一年間、村おこしのボランティアとして派遣されたこと。任期满后、定住を決意。いずれは朽木で結婚したい! という夢を果たしたのでした。色白の和風な彼女にはびっぴり嫁入り先だと納得。新婚夫婦を迎えた永昌庵は(今のところ)ホカホカです。是非足を運んでみて。

●永昌庵
TEL:0740-38-3233
定休日:毎週水曜日、第1・3木曜日
ホームページ
<http://www.zb-ztv.ne.jp/eishouan/>

●本名加藤みゆき。人口17人の集落に住み3人の子育てに奮闘中。将来、家族で海外へ旅行するのが夢。

いまごろ何しているのかなあ

今関 信子



イラスト：千田 満

五月の始めに、夫の母と私の母が、あいついで他界しました。三日月がいでした。あの時は、あれ？うわっ！うむむ……、と疑問詞や感嘆詞の連続でした。秋を感じる今ごろになって、二人のことを、思い返すことができます。二人は、九十七才と九十六才でした。遺品を整理してみますと、二人の人生が浮き上がってきました。

夫の母は、女学校時代に、彼女のたしかな足跡がありました。書、華、料理、編み物、折々に書きとめる短い文章など、多感な時期に文化的素養を身につけたようです。このことが、彼女の人生に大きな力となって働いています。とくに書で得た栄誉は、終生の誇りで晩年になっても、彼女に自信と意欲を持たせていました。

私の母は、幼い日に関東大震災を経験し、その後の人生は、平穩ではありませんでした。「ぼろは着ても心は錦」と「おてんとさまは、みていらっしやる」は、母の口癖でした。文化からほど遠い日常の中で、彼女の不屈の精神と常に持っていた希望は、あの二

つこのことわざに因るものでしょう。死ぬときまで、この言葉に信頼していました。彼女は、その時代が持っていた庶民のモラルを生きたのです。

育ち方も性格も大きくちがう二人ですが、私がいることで、お互いの関係を作りだしていきます。「お雛祭りしましょうか。」「庭のアヤメがきれいに咲きました。」と、事に触れ時を逃さず、夫の母が作り出す時間がありました。「お母さん、どうしているかと思つて。」「元気な顔が見たくなりまして。」と、時を選ばず、私の母が作り出す時間がありました。

どんな時でも、スタートは、夫の母の手作りの牛乳羹でした。小さなハート型です。「いつも同じもので。女学校の時、料理の時間に習ったんです。田舎者のわたしは、仰天するほどおいしくてねえ。」「そこから夫の母の女学校の時代に話の花が咲きました。牛乳羹は、空色の皿の上で、ふるふると震えて、恥ずかしそつにも、嬉しそつに見えました。「これを食べると安心します。」「さつでも不意の来客に備えて

いる夫の母の暮らしぶりに、私の母は敬意を払い、感動して食していました。二人は共に第二次世界大戦を経験しています。「戦争はいやですねえ。」「平和が良いですねえ。楽しい。」「二人の語らいいには、必ずこの言葉が出てきました。

二人は、近づきすぎず離れすぎずの距離を取りあっているようにおもわれました。ところが、この世の別れの時、「ごいっしょしましょつ。二人の方が心丈夫です」でも声を掛け合つたように、私たちのもとを去りました。二人の関係は、私を感じていたより深かつたのでしょうか。

今ごろ何をしているのでしょうか。半年も経つて、ハイカラだった夫の母、何事も体当たりだった私の母。二人と交わした言葉や日々の作業やその所作が、甦つてきて胸がいつぱいになります。

秋風が人を恋しがらせるのでしょうか。さいきん、涙ぐんでいる自分に、気がつくときがあります。

共に生きてこそ

今問はず

●いませきのぶこ1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。

〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987 童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995 国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で「寺子屋」づくり」2003 PHP 研究所など多数。

●せんだ みつる1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、コマックやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

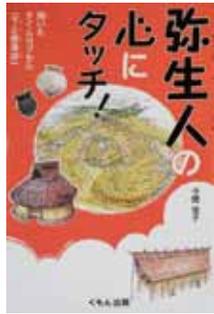
M. Senda

本の紹介

最近入手した、気になる本・CD・DVD
をご紹介します。

BOOKS

弥生人の心にタッチ！
開いたタイムカプセル下への郷土館



- 著者／今関信子
- 発行／くもん出版
- 価格／1400円＋税
- 内容／2200年前のくらしの様子を、目や、耳や、鼻や、体で、感じてみよう。弥生時代の人たちと会えるかも…。弊誌でお馴染み、今関さんの感動から生まれた本。

いのちにごたわわる政治をしよう！



- 著者／嘉田由紀子
- 発行／風媒社
- 価格／1000円＋税
- 内容／「なぜ希望なき政治を選ぶのですか？」「地方から国を変えるための自治の実践についてまごめた一冊。」

達老時代へ
老いの達人へのまごな



- 編者／横山俊夫
- 発行／ウエッジ
- 価格／1400円＋税
- 内容／いかにも老いと向き合おうか。各分野の専門家が、多様な老いのかたちを論じ、「老い」を楽しくおもしろく、味わう文化を探索する。

旅は人に生きる喜びを与えるものです
— 塾長・山田學の物語



- 編著／旅行産業経営塾
- 発行／ポット出版
- 価格／1200円＋税
- 内容／旅行・観光は成長戦略産業だ。旅行業界に大きな足跡を残した、滋賀県生まれ・山田學の物語。

湖北のホトケたち
人々の祈りと暮らこ



- 著者／桑田潔
- 発行／サンライズ出版
- 価格／1800円＋税
- 内容／近江の寺には多くの仏像があり「ホトケさまを守らせていただく」という村人の心がある…。

偉大なる、しゅららぼん



- 著者／万城目学、関口太郎
- 発行／集英社
- 価格／562円＋税
- 内容／万城目学の傑作小説を華麗にコミカライズ！琵琶湖を舞台に不思議な力を持つ少年のスクールライフを描く。2014年3月映画公開。

和みの歌



- 著者／滝山しきぶ
- 発行／創芸出版
- 価格／1500円
- 内容／明治・大正・昭和・平成を生きてきた100歳のしきぶおばあちゃんの感動の記録。

講演日記

執筆者懇談会33

皆様のご支援でたくさん
の講演依頼を頂きました。
10月～11月の講演を
ダイジェスト版でお知らせ
致します。



- 日時：10月7日
- 主催：弊誌
- 場所：旧大津公会堂、大津グリル
- 参加：18人
- 内容：42号『ほほえみで昭和のくらし』の特集を決定。執筆者の皆

滋賀GN 「ミネセミナー」

様より10周年を迎えての
メッセージ、これからの10年に向けて
エールを頂戴した。



- 日時：10月26日
- 主催：滋賀グリーン購入ネットワーク
- 演題：「限りある資源を『食と人』で好循環」
- 発表：上岡瞳
- 会場：びわ湖環境ビジネスメッセ2013 滋賀GNブース内
- 対象：一般

講演会「滋賀を知る」

- 参加：約20人
- 内容：びわ湖環境ビジネスメッセにて滋賀GNが主催するミネセミナーに参加し、M・O・H活動を紹介した。



- 日時：10月28日
- 主催：滋賀県児童図書研究会
- 演題：「ひまからでまこと」「近江の魅力」
- 講師：辻村琴美
- 特別ゲスト：森建司
- 会場：守山市立図書館
- 対象：会員
- 参加：15人

内容：M・O・H通信が生まれたきっかけや活動内容、また雑誌「湖国と文化」で取材した滋賀の寺社仏閣を写真と共に紹介した。参加者からは「地元の寺社仏閣でも知らないことがたくさんあり、勉強になった」という声も。後半は特別ゲストとして森が「M・O・Hの心」を語った。

丹波発ニューツーリズム 交流会

- 日時：11月22～23日
- 主催：丹波発ニューツーリズム実行委員会

演題：「ひまからでまこと」～地域交流誌が導く地域の未来～
事例報告：辻村琴美
会場：ライブピアいちじま 大ホール
対象：一般
参加：50人
内容：ニューツーリズムとは、旅行先での人や自然との触れ合いを重要視した旅行のこと。「交流人口は日本の里地を活性化させる！」地域活性化に取り組む団体として、M・O・Hの取り組みを発表した。



第7回 ♪M・O・Hせんりゅうコンテスト 2013♪ ベスト3決定

皆様よりご応募いただいた「M・O・Hせんりゅう」の中から、今年もベスト3を選出しました！
編集部での1次選考、執筆者懇談会と社内での2次選考を経て、びわ湖環境ビジネスメッセ2013で選ばれたベスト3の発表です！

《1位》 おかげさま 昔があって 今がある (支持率16.0%)

《2位》 手をあわす 毎日感謝 おかげさま (支持率15.5%)

《3位》 ありがとう 思える気持ち 大切に (支持率13.5%)

<次点> ほどほどに 親のする事 子がまねる (支持率13.0%)



昨年に引き続き、「おかげさま」を使ったせんりゅうに人気が集まりました。これまで人気だった「もったいない」から、「おかげさま」や「ありがとう」といった感謝する気持ちへの意識が強くなっているように感じます。びわ湖環境ビジネスメッセで

は200名に投票のご協力をいただきました。作句していただいた皆様、投票してくださいました皆様、ありがとうございました。引き続き、M・O・Hせんりゅうコンテスト2014へのご応募もお待ちしております♪

能登川南小学校5年生の皆さんの作品です。

- ♪ありがとう みんなのえがお うけとめて
今村 ちな
- ♪おかげさま みんなわらって みなえがお
高橋 希歩
- ♪おかげさま その一言で 笑ってる
東 あやか
- ♪手をつなご 一人じゃないよ 大じょうぶ
永田 若葉
- ♪M・O・H通信 人を笑顔に してくれる
東 ひろき
- ♪がんばって その一言で がんばれる
林 聖也
木村 圭悟
出路 晴輝
- ♪いつも支えて くれる人
日下部 翼
- ♪M・O・H通信 もったいない ひとりで読むと
津田 知輝
- ♪人と人 みんなの笑顔 大切に
大辻 晶子
- ♪ありがとう その一言で つながるよ！
加藤 鈴菜
- ♪ちょっとした ころろがけで 笑顔なる
岸本 俊英
- ♪おかい物 たくさん買うと もったいない
匿名
- ♪ほどほどに いらぬ物を ためないで
中村 一心
- ♪ほどほどに 夜食はだめだよ ひまんしょう
匿名
- ♪かわやみち こみをすてるの ほどほどに
稲村 真吾
- ♪M・O・H通信 おかげさまで みな笑顔
竹田 実由
- ♪友達と みんなでつなぐ 心の輪
上林 柊哉
- ♪ありがとう おかげさまで いい気持ち
おく田 ほのか
- ♪ありがとう その一言で あったかい
喜多 舞美
- ♪ありがとう みんな楽しく 笑顔でさ
植田 恭平
- ♪おかげさま つなぐ言葉は もったいない
林 秀真
- ♪みどりのね おかげさまで 生きてるよ
岩崎 永莉
- ♪町と町 全部大切 つかおうね
西山 りょう
- ♪ありがとう その一言が あたたかい
橋 恭佳
- ♪人々が むだをはぶくと エコロジー
杉谷 かず也
- ♪むだがない そんな世の中 つくりたい
前田 悠作
- ♪M・O・H通信 つなぐ言葉は ありがとう
辻 恒喜
- ♪ありがとう その一言で 笑顔の花
元木 美羽
- ♪時をこえ 生まれかがやき そのめぐみ
神田 里彩
- ♪あいさつで つないでいこう 心の輪
渡辺 あすか
- ♪あいさつで みんなの心 つながれる
岩根 泉季
- ♪人と人 つながる言葉 ありがとう
中澤 あみ
- ♪手をつなぐ にぎりしめたのは キズナと愛
今井 もえ
- ♪人と人 みんなに広がる 笑顔の輪
豊島 怜奈
- ♪ありがとう 心をついに がんばろう
いとう はるか
- ♪心と心 ひらく言葉は いつもいっしょ
谷澤 成耶
- ♪人と人 ゆってることが 分かったよ
とみ江 まい

こんなん
見つけた

● 森の護り神「フクロウ」



幸運をもたらすシンボルとして崇められてきたフクロウ。太陽生命の森林も末永く護ってもらえるようにと願い生まれました。木工のマグネットです。太陽生命保険(株)創業120周年記念品。

● うしさんモーニングコースター ..



お気に入りのカップを置いてモーニングタイムをお楽しみください。株式会社アマキの廃材マットをリサイクルしたうしさんコースター。

詳しくはこちら
株式会社アマキ
URL:<http://amaki-company.com>

● 近江の麻「滋賀小紋 しじみ柄」



セタシジミの柄がかわいい麻のはんかち。じっくり見ると隠し柄を発見!みなさんも見つけてみて。

詳しくはこちら
湖東繊維工業協同組合
URL:<http://www.biwa.ne.jp/~kotosen/>

● びわ湖の森を元気にするkikitoペーパー



滋賀の間伐材を活用してできたkikitoの紙を使いませんか?森林資源を循環させ森林保全を。

[お問い合わせ先]
一般社団法人kikito
〒527-0226 滋賀県東近江市一式町564-5
mail:info@kikito.jp
URL:www.kikito.jp

読者
プレゼント!!

もうちゃん
スマホ・
ペンスタンド
〈組み立て式〉



びわ湖環境ビジネスメッセでもお配りした、もうちゃんのスマホ・ペンスタンドを抽選で10名様にプレゼントします。ぜひご応募ください。

住所・氏名・電話番号を明記のうえ下記宛先まで。記事の感想などもお待ちしております。

締切は1月末日。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

[宛先]
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
新江州株式会社
循環型社会システム研究所 M・O・H通信

受賞
しました

新江州に滋賀労働局長優良賞!

女性の能力を積極的に活用する企業に贈られる、厚労省の「均等・両立推進企業表彰均等推進企業部門滋賀労働局長優良賞」を、新江州が受賞しました!

“女性の意識改革”を進めるべく2009年より女性力活性化委員会が設置され、女性社員が働きやすい職場づくりを探り、育児・介護休業制度の拡充などを行ってきました。

今後もより一層、働きやすい職場環境を目指して取り組んでいきます!
(新江州 女性力活性化委員会より)



表彰式の様子

HONEY'S ハニーズ(おやしバンド)の 懐かしエレキライブ

米原市朝日・光西寺報恩講にて

お寺で
ライブ!?



- ① 報恩講が催された光西寺
- ② なつかしの昭和メロディに酔いしれて

11月9日、国の重要無形文化財に指定されている“朝日の太鼓踊り”で有名な滋賀県米原市朝日にある光西寺のご本尊がまつられる本堂で、♪テケテケテケテ♪と昭和のサウンド26曲が「ハニーズ」の演奏で満たされた。

ハニーズは平均年齢60才、男性4人女性1人で構成する。中学時代をともに過ごした友達が7年前にバンドを再結成。テリーのテーマや津軽ジョンガウ節など

日本のエレキギター奏者の第一人者、寺内タケシさんの定番曲をコピーする。門徒の方から「じょうずや〜」の声も。

リーダーの大橋良夫さんからメッセージ。「いつでも演奏にうかがいます。ご連絡ください」。

【お問い合わせ】

〒526-0032 滋賀県長浜市南高田町597-2
大橋良夫(リーダー) 090-6904-7253

開催
します

M・O・Hニュース

M・O・H NEWS

仲良し

しのみや家の 快適エコ生活

作:篠宮博史 画:©サトウチユウ



M・O・H 10周年謝恩会 《M・O・Hカフェ》開催

M・O・H通信10周年を迎えるに当たり、愛読いただいております読者の皆様、執筆者の先生方、本誌に登場いただいた方々にお集まりいただき、M・O・Hのつながりを深める交流会(M・O・Hカフェ)を開催します。

皆様、ぜひお越しください。

- 開催日：2014年3月21日(祝金)
 - 場 所：長浜ロイヤルホテル
 - 人 数：50名
 - 参加費：3,000円
 - スケジュール(予定)
- | | |
|-------|------------------------|
| 11:30 | 受付開始 |
| 12:00 | スタート
食事会 |
| 13:00 | 感謝の会
講演&パネルディスカッション |
| 15:00 | グループ討議 |
| 16:00 | 終了 |

嘉田知事に
会えるかも!

【お問い合わせ・お申込み】

〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
新江州株式会社
循環型社会システム研究所 宛
TEL：0749-72-5277 FAX：0749-72-8681
Mail：ueoka@shingoshu.co.jp
住所、氏名、電話番号、参加人数をご記入
ください。

森代表のインタビューが
掲載されました!

掲載
されました



「三方よし通信vol.2」(発行:エファイ)
「ブータンミュージアム通信vol.3」(発行:
NPO幸福の国)

※ブログで冬編掲載中 URL:<http://www.mohmoh.jp/>

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」の発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する心とか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M・O・H通信～」を発行する。

《 M・O・H通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111

滋賀県長浜市

川道町759-3

循環型社会システム研究所

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@

shingoshu.co.jp

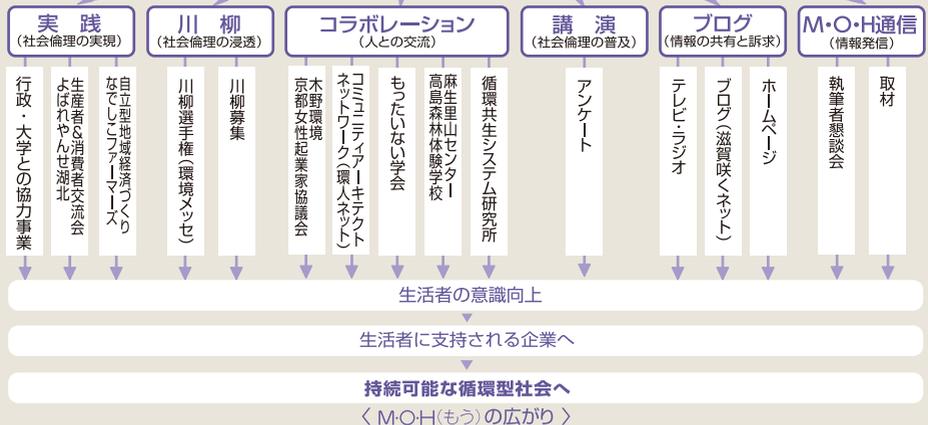
代表:森 建司

担当:つじむら ことみ

上岡 瞳

[M・O・Hコンセプトシート]

M・O・H=循環型社会をめざす言葉
(もったいない・おかげさま・ほどほどに)



読者の声

- ★「しなやかでいこうー」たしかに！そうありたいと思いました。
- ★特集の「しなやか」というキーワード、心にしみました!!
弘中 史子
- ★しなやか…、多様性をもって(共存)、争わず柔軟に(共生)、しかし軸は振れず大地に根差す(真義不動)、ということでしょう。か。しなやかでいこうー! 麦の家も精進してまいります。
- ★麦の家 山崎隆
- ★弊社の取組記事を掲載いただき驚いていたところです。本格的な保全に向けた取組はこれからです。恥じないよう心して進めます。
- ★株式会社ダイフク 山本剛広
- ★ふるさとの香りを感じながら、人生が豊かになる教書ですね。これからもすばらしい内容にチャレンジし、読者を心豊かにしてください。
- ★バイン株式会社 上田豊
- ★いつもながら三山さんのお里の話、にほっこりいたしました。
- ★西宮市 西本 柳枝
- ★パパラ漫画が面白かったです。癒されました。
- ★秋田市 鈴木 秀顕
- ★改めて読ませていただき、感激が感謝がこみ上げてきて、喜びをかみ締めております。私の一生の中の大きな大きな宝物が出来ました。
- ★甲賀市 宿谷 正子
- ★貴誌のコンセプトは揺るぎなく、私が現役教師時代に初めて貴誌を手にしたときの共感し感銘を受けたことが蘇ってきました。

- またメッセにて素晴らしい展示を見学させていただきました。貴重な体験をさせていただき、感激しました。
- ★M・O・H せりゅうコンテスト、どれも捨てがたい味のある作品ですね。
- ★M・O・H 守山市 上田 英津子
- ★私もM・O・Hに類似した考えと行動で社会貢献できればと日々考えながら生きています。65才となり、生きることおもしろいナーと思いつつ、仕事で汗をかいてます。いつれにしても、自然を大切に頑張りたいです。
- ★古河市 赤堀秀夫
- ★M・O・Hの倫理観よくわかって良いです。
- ★長浜市 鈴木 幸子
- ★いつまでも継続して下さい。
- ★安八郡 佐野輝一
- ★限りある 人生だから 大切に
野洲市 南敏孝
- ★節電も 御身大切 ほどほどに
長浜市 川崎 昊
- ★スーパードイツも持参の レジ袋
彦根市 疋田勝司

M・O・Hなぞかけ

- ◆道の駅あじかまの里とかけつて ハイブリット車と解く
— その心は、どちらも脚光を浴びています (塩津 COO)
- ◆道の駅せせらぎの里とかけつて 清涼ドリンクと解く
— その心は、どちらも爽やかさが売り物です (甲良、コーラ)
- 長浜市 伊香の退屈男

《次号予定》2014年3月発行予定

- 特集:『しあわせ/10周年記念号』
- 特別寄稿/「地域にエールを!」田原総一郎氏
- 特別鼎談/「今までの10年これからの10年」
嘉田由紀子知事+小林隆彰師+森建司
- 若者座談会/「よそ者、若者、ばかもの」
- 取材/びわ湖エコアイデア倶楽部、堀場製作所、ダイフク
- あの人は今/「エシカルデザイン」岡靖敏氏
- 寄稿/高月観音の里歴史民俗資料館、循環型社会創造研究所えこら
- MOHな店/グリーンキッチン
- MOHな人/谷口隆一氏
ほか
- 連載/通常通り
- ※敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

- ★過日、板倉安正氏が永眠された。故板倉氏は弊誌16号(2007春)にて「先人の知恵に学ぶ環境とエネルギー」を寄稿いただき、24号(2009夏)「共に働き、共に生きる“人づくり”」では弊誌の森との対談でご登壇いただいた。穏やかなお人柄で暖かく接していただいた。ご冥福を心からお祈りする(合掌)。
- ★今号は昭和に挑戦。ふる里大阪の懐かしさを思い出す。……………(こと)
- ★幼い頃、火傷をした私に植木鉢のアロエをブチッとちぎって渡してくれたお婆ちゃん。米の研ぎ汁は汚れをよく落とすから、食器洗いに使うよって教えてくれたお婆ちゃん。「もったいない! 美容にもいいんやで〜」と、ミカンの皮をお風呂に入れた時はびっくりしたけど、いつでも「お婆ちゃんの知恵袋」にはかなわんな〜。……………(ひとみ)
- ★先日、若い美容師さんに「昭和な」ってどんな感じか全然わかりません」と言われてショック。昭和はもう遠い過去!? 昭和な女ですが何か? ……………(あや)

《M・O・H通信》受付中!

あなたも「M・O・H通信」を読んでみませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、

fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M・O・H通信》申込書 0749-72-8681

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住所	〒		
電話	FAX	メールアドレス	
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

<h3>M・O・H通信 Vol.42(通巻43号)</h3>		2013年12月20日発行 発行部数6,300部
<p>●編集・発行/新江州(株) 循環型社会システム研究所 M・O・H 通信編集局</p> <p>代表 森 建司 編集長 つじむら ことみ 編集 上岡 瞳 取材 山崎 彩 古田 紀子</p> <p>デザイン 伊達デザイン室 写真 辻村写真事務所 肥田 嘉昭</p> <p>印刷 ブランセル ホームページ ブランセル</p> <p>●創刊/2003年3月度</p>	<p>●執筆者懇談会</p> <p>内藤 正明 今関 信子 海東 英和 堤 幸一 山田 朝夫 進 ひろこ 下西 康嗣 中村 誠 末永 國紀 笹山 千怜 花田 真理子 結城 美枝子 弘中 史子 松崎 和弘 畑 裕子 井上 昌幸 山崎 隆 辻村 耕司 三山 元暎 佐々木 洋一 加藤 みゆき 徳永 拓美 清水 安治 山口 美知子 檀上 俊雄 岡部 達平 森 孝之 豊田 一美 堀越 昌子</p> <p>(順不同・敬称略)</p>	<p>●ご協力</p> <p>滋賀県 滋賀県立大学 琵琶湖環境科学研究C 近江環人 地域再生学座 もったいない学会 NPO法人環人ネット 循環共生社会S研究所 野洲生活学校 高島森林体験学校 EEネット 麻生里山センター 中小企業家同友会 (順不同)</p> <p>●支援</p> <p>新江州(株) 〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3 TEL.0749-72-5277 FAX.0749-72-8681</p> <p>★ブログ★ http://moh.shiga-saku.net/</p> <p>★ホームページ★ http://www.mohmoh.jp/</p>
		

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。



洋 Sasaki